

八 天 會 雜 誌

第參拾九號

明治三十七年十二月十五日發行

(非賣品)

北辰會雜誌第三十九號目次

論 説

詩趣を論す

吾が觀たる社會主義

家庭の改良

美的生活論

提婆傳

小言三則

雜錄

木曾淨吉

野田鴨水
龍山北川

堀田相爾

篠原水衣
斗牛

蘆笛

鳥さし

雜吟

四高俳句會詠草(甲辰秋の卷)

K. N.

圓

鶴聲庵小集

雜報

卒業證書授與式。卒業生諸子を送る。佐野先生

を送る。新人諸子を迎ふ。北辰會役員氏名。代

議員氏名。北辰會委員氏名。天長節祝賀會記事。

野人語。

寮

新入寮生宣誓式。講言狂語。第一回小茶話會記

事。第一回講話會記事。第一回大茶話會。佐野

先生送別會記事。武道仕合。寮仕丁柿澤半平の

事。寮の天長節。明治三十七年度北辰會豫算報

告。寄贈雜誌。

附錄

明治三十六年中本校圖書館增加書目

木犀いけて

浦井恒堂

香周君

隱君子

紫影

枯桑

紫影舊稿

散文詩(ツルグニエア)

夕榮元雲(オルガ)

百舌鳥の聲(銃獵瑣談)

落花餘芬引

題半相國書金泥阿彌陀經後

秋聲賦

北辰會雜誌第三十八號目次

論 説

詩趣を論ず

木曾淨專

靜夜の鐘聲を聽て、夢中の夢を喚び醒し、

澄潭の月影を觀て、身外の身を窺ひ見る、

鳥語虫聲、總て是れ傳心の訣、

花葉草色、見道の文に非るは無し。

豈啻に傳心の訣とのみ云はんや、又啻に見道の文とのみ叫ばんや、觀じ來れば、天下何物か、眞趣の發露たらざるあらん。

然かも恐る、盲者は天光の熹微を望み難く、聾者は琴の調べを味ふ能はざるを。見ゆずと雖も天日隠れたるには非ず、聞えずと雖も琴線振はざるには非るなり。

物ありて詩趣存するか、詩趣を解するの識ありて詩趣こゝに生ずるか、西歐の詩人吾人に告げて曰く

Eben wie ein grosser Dichter weiss die Natur auch mit den wenigsten Mitteln die grössten Effekte

herover zu bringen. Da sind nur eine Sonne Bäume, Blumen, Wasser und Liebe. Freilich, fehlt letztere im Herzen des Beschauers, so mag das Ganze wohl einen schlechten Aufblick gewähren, und die Sonne hat dann bloss so und so viel Meilen im Durchmesser, und die Bäume sind gut zum Einbeizen, und die Blumen werden nach den Staubbäumen fäden klassifiziert, und das Wasser ist nass,诗人が愛を解するに嵩高なる情操を以てせば、吾人が所論庶幾へはまだ通ずるを得んか。思ふに天の星辰地の山河、春花秋月の變易に對して、常に其眼を開か、常に其耳を澄まし、神心を化育するの識あらは、宇宙の詩神は安祥として門戸を訪はんなり。吾人をして微々たる數紙の上、冥想と觀察とに於ける詩の世界を探らしめよ。

一 哲學界の詩趣

春回ぐりては花の冠を着け、夏を迎へては緑の衣を着る、秋としなれば黒姫山も錦をまとひ、冬は敷く千里の雪、碧落の星辰は夜毎神秘の囁きを漏らし、紫電閃たりては乾坤爲めに輝く。千早振る神の御代より、かくしてかくあるべき轉變の姿は、げにやターネスの疑惑となりて、西歐の天地は早くも一千五百余年の昔、神話の森に哲學の滴りを見るに至り。

仰いでは無限の天、俯しては無限の地、此間の萬象に對して、とても小なる自己を顧みる毎に、「我はそもそも何者ぞ」「世界そもそも何物ぞ」、或は恐れ、或は悲しみ、或は歌ひ、或は讚誦し、かくて生れし印度上古の哲學には、げにプラマニア・ートマンとの同根を說きて、現世界の迷惑を解脱すべく、人は修行にいそしみしもよ。

天は覆ひ、地は載す、花咲かぬ世はありなむも、哲學志想の存せぬ人の世はあらじ。自己と自己以外とを思ふ毎に、千變萬化の活現象に接する毎に、宇宙と人生との解釋はそも幾何の詩趣もて試みられしぞや。萬物に神性を認めし時代を以て、直ちに愚説と排する勿れ。ピタゴラスの數理論を以て余りに無味なりとなす事勿れ。ソフィストの怪説を以て惰落の聲とのみなす事勿れ、ソクラテースや、プラトーンや、ストイックや、さては又中世紀の基督教的哲學の時代より、近世に入りてデカルトの唯我説や、ライプニッツのモナッド論や、バーケレーの唯念論や、更に懷疑時代を過ぎてカントの純理批判や、ヘーゲルの凡理説や、ショウベンハウエルの解脱主義や、ハルトマンの無意識哲學や、スペンサーの進化説や、古往今來甲論乙駁の筆舌の跡、千波万波の干涉の歴史、疑暗につぐに光明を以てし、怒罵につぐに恐怖を以てし、涙につぐに歎を以てし、靜坐につぐに舞踏を以てし。かくて十九世紀を終りたる今日に至る迄、或は厭世の響を残し、或は機械的たりとの嘲を傳へ、彼の Ding an Sich を叫びたる大哲カントも、今は昔の花と散り失せては、未だ今世紀の哲學界に一縷の光明を点じて舞台に勇飛せん大哲ありとしも聞かず。舊と云はゞ今日も舊、新と云はゞ太古も新、たゞ宇宙と人生と、而してそが融和とに心惱みつゝ、快樂を追ふアナクレオン、天然を歌ふジョダノブルノー、世を悲觀せるショウベンハウエル、冥目して考へ來れば、人の思錯には詩そのものは溢れたり。

詩神戯れて人に眼を與へ、鼻を與へ、耳を與へ、口を與へ、手を與へ、足を與へ、然して大腦小脳延髓脊髓を與へぬ。泣くに口を以てし笑ふにまた口を以てす、打つに手を以てし跳るにまた

手を用ふ、善を考ふるに腦を以てし惡を企つるにまた腦を以てす。眞面目なるべき哲學の歴史も、一面の觀察にはいかに煩むの悲劇と、樂天の喜劇とを示せしぞや。冥想の一面にはいかに人智に伴ふ小宇宙の種々に現れ來りしぞや。詩化するには余りに大なる哲學史も、半夜冥想の枕頭、詩神と歌ふべき吾人の舞臺は、上下滔々數千載、洋の東西の限かけて、天地悠久々、彼の山頂の孤月輪に對する詩趣あるにあらずや。

聲を大にするも人間は畢竟人間のみ、難解の語を連ねるも我以外は依然として我以外のみ、我と我以外との解釋に、單獨に會得すると複雜に議論すると、人間得脱の上に幾何の影響ありや。

硝子瓶に入れし蟻は途方に暮れて、籠中の黃鳥は春風に歌ふ、觀すれば演劇なる歴史の跡、政治史か、文明史か、而して吾人の哲學史か、冥想の上には詩集なり、觀察の一面には戯曲なり。

哲學界の詩趣は、かくの如くにして日夜また吾人の冥想の上に來る。

古聖云へるあり、

林間の松韻、石上の泉聲、

靜裡聽き來て天地自然の鳴佩を識る。

草際の煙光、水心の雲影、

聞中觀去て乾坤最上の文章を見る。

靜裡の諦聽と聞中の靜觀と、これ哲學をして詩趣充溢たらしむる所以に非ずや。

二 科學界の詩趣

誰かいふ科學は無趣味なりと、

若し事物に對して西歐詩人の所謂愛あらしめば、若し觀察に於て明徹なる一隻眼を具せしめば、誰か科學の園に遊んで詩神と邂逅するの難きを嘆せんや。

乞ふ來れ、吾人まづ君を導きて吾人が歌ふべき科學の園に入らん、

金針開き落つる庵頭の栗、君これを見て詩趣なしと云ふか、而かも思へ、栗は天上に落上せずして窓前に落下せるこれ如何ど、ニウトンを地下に蘇へさすと雖も君は無盡の詩趣を解せん。電光ノヽとして閃きぬ。雷鳴般々として轟きぬ。驟雨沛然として到りぬ。松葉に五色の露輝きぬ。彼の山の麓には虹橋を架せり。

これ科學の實驗に非ずや。

秋とはなりぬ、雲漠として田園の夕ぐれを罩めたり、鏘然として山寺の鐘聲到りぬ、日はすでに西山に隠れて余光なほ此世を惠むなり。見ようるわしき夕映の色、紫か紅か、藍か樺か、あゝ金色の雲棚引く彼方遙かに心を驚する時、恍たる美感そも如何ぞや。月東巒に出でぬ、今宵は三五の明月なり、試に琵琶を取て月前に彈せんか、大絃小絃、嘈々切々、裂帛の一聲にうた、潯陽江頭を偲ばしめん。耳を傾けよあの虫の音、霜に唧つ聲の憐れなるに非ずや、秋風一陣、芒の花を舞はせぬ。

これ科學の實驗に非ずや。

見よ轟然として鐵橋を渡るものあり。號外を呼んで我軍の大勝を告ぐ、二十世紀初頭の大戰には、

いかに機械力の甚大なりしを示せしよ。遙に見ゆる彼の山麓の灯火、そは某市の電灯なり。負傷兵の盲彈はX光線によりて探りしとよ、左なり磁石によりて見れば我がなつかしむ故郷は彼方なるべからか。ア、秋風寒し、あはれ遼東の野には熱血も霜に凍り、夜な夜な白雪、陣營を埋むとよ。長安万户の砧の聲、いかに悲しくひゞへらん。

これ豈科學の實驗に非ずや。

乞ふ來れ、更に自然科學の園に入らん、

春のあした、霞罩めたる野邊に立ちて、試に四方の景色を眺め見む、百花絢爛の糸は、いかに美妙なる錦を織り成せしぞや。綠なす廣き野もせを走りつゝ、彼方山のほとりにせよらぐ水の、いかに仙槎の曲を奏でしょ。

Sehet die Vögel unter dem Himmel an; sie säen nicht, sie ernten nicht, sie sammeln nicht in die Scheinen;.....

Salomo in aller seiner Herrlichkeit nicht bekleidet gewesen ist, als derselben Einus.

げにシロモンの榮華の極みやく、野の姫百合の姿にたゞ比やぐれど、晴れたる天高く歌ふ鳥の聲、陶朱の富もいかで其一聲を左右し得ん。

秋の夜を清澄なる天が下に佇みて、つらゝ見れば爛として星光六合に満つ、殊に視よ、銀河

遠く東西に走りて、嵩高の詩趣簇然として湧くに非ずや。

ア、天然科學者の領地のいかに善良を盡せしよ、一塊の石を取り、一莖の花を折り、一羽の虫を捕へ、一滴の水を掬ひ、これを解剖しこれを研究し、其一微塵の形態を顯微鏡下に照らす時、ア、其壯觀はそもそも何にか惚へん。科學者は肉眼にては窺ふべからざる美妙の天地、秩序ある壯嚴、光明ある詩趣を其鏡下に獨占す、吾人は顯微鏡下に於て始めて世界の美觀を歌ふべし。一莖の花も鏡下には万重の光彩を点ト、一滴の濁水も鏡下には美麗なる綠虫の逍遙を示す。

天然科學の詩趣、吾人恍惚として科學者の天地に羨然たらずんはあら。

嗚呼誰かいふ科學は無趣味なりと、
宇宙はエネルギーの變易によりて、活如として千古萬古に文章を説く、物理學者の天地はこの
文章の園に築かれしに非ずや。
天の星辰地の山河、大を縹渺の蒼天に探り、小を顯微鏡下の微妙に訪ふ、天然科學者の生活は、こ
の光輝ける詩の庵に非ずや。

天の星辰地の山河、大を縹渺の蒼天に探り、小を顯微鏡下の微妙に訪ふ、天然科學者の生活は、こ
げに羨むべき天地に日夜をくりかへすなり。

嗚呼科學の天地や、詩趣の豊富なる蓋し天下絶品といふべし。秩序あり、規矩ある宇宙の大精神
は、この園に入りて怡然として始めて諾するを得ん。

詩思は灞陵橋上にあり、

微吟就る時林岫便ち已に浩然たり、
野興は鏡湖曲邊にあり、

獨往の時山川自ら相映發す。

古聖の至誠、吾人は之を以て光榮ある科學者の座右に捧ぐ。

III 詩趣ある人生

Ein Fichtenbaum steht einsam

In Norden auf kahler Höh?

Ihn schläfert; wit weisser Decke

Um hüllen ihn Eis und Schnee.

Er träumt von einer Palme,

Die fern im Morgenland

Einsam und schweigend trauert

Auf brennender felsenwand.

吾人は好んで此詩を誦し、誦する毎に轉た人生の機微を察し、而してこゝに吾人の詩趣を味ふ。」

思ふに「かくいふ我はブライマなり」と叫ひたる上古印度の哲學者は、自己を提げて高上の信念に憧れしならん、現象即實在を叫びたる西歐の大哲は、天地萬物の同根に彼が解脱の基礎を横へしならん。

「我に地球以外の立脚地を與へよ」とは、人心向上の道途に聞ゆべき天來の警聲たらずんばあらず。然り、吾人は半夜冥想の時、神を遠く縹渺に放ちて、遙かに百万由旬の下界を下瞰す。我はブライマなりとは云はず、現象即實在なりとは叫ばず、たゞ吾人をして下瞰せる彼の球面上の光景を語らしめよ。

雲漢漠として東西南北なく、四維の天風ゆるやかに六合を吹く、一球あり、溷焉として此間にかかる。上に物あり、高きを山といひ低きを海といふ。其間生物あり、蠢々として動き、嘎々として鳴く。其動くや四足の虫に箱を曳かせて廟堂と稱する穴に出入し、或は黃金と稱する無機物を追ふて孜々として働き、或時は水に入り山に登り、火を踏み荆棘を分ち、千差萬別、つぶさに説くへからず。其鳴くや、或者是天下の權といひ、或者是民權と叫ひ、或は自由、或は正義、老者は慾に鳴き、若者は戀に鳴く、或者是強いて笑はんとしていつしか悲調を帶び、或者是鳴かんと欲して終に血を以て涙に紹ぐ。此光景は眞に一轉瞬の間のみなりと雖も、例へば活動寫眞の如くにして長く連續せり。

忽然として吾人はいつしか冥想より蘇へれり、蘇へりたる天地は萬多の差別を示しぬ。彼の高波の如き山、彼の低波の如き海、これをこの天地に眺むる時、吾人は山高く海深きに驚きぬ。而して彼の蠢々乎たりし生物の、やがて吾人自身たりしを自覺する時、吾人は驚愕の叫を禁する能はれりぬ。吾人は今黄金を追ひ、名譽と稱するものに憧れ、四足の虫の曳く箱を感心し、天下の權を大なりと考へ、人爵をいたるものと思ひ、民權自由の叫に歎呼す。而して吾人は又時に戀愛と

稱するものなどに感染して、やゝもすれば無き洋服の袖を絞らんと欲す。吾人は何物と問ひ、如何と質し、何時と疑ひ、何故と叫びき、されど其一二を辛うして知りそめし間に、頭上霜飛んで人生の秋を告げ、日脚すでに低くして龍河原上の夜色目前に迫れり。

見よ、過去十九世紀の文明は、いかに人智の發達を語りしか、而して一千余年の裏面の潮流は、いかに人の血と骨とを投じてこの文明を購ひ得たりしか。精神の向上に多大の希望を囁せられたる二十世紀は、其原頭まづ遼東の野に血と肉との交換を行へり、ア、二十世紀、血腥き月桂冠は、げに過去世紀唯一の遺産として、二十世紀が必然受くべき財寶なりき。

冥想の天地にはかすかなりし彼の球面上の聲は、この天地には山嶽を覆へす愛國の叫びなりき、スラヴ民族は彼等が父祖の遺訓を奉じて、極東の野に其厭ふへき網を張れり、大和民族は極東の和平を標榜して、漢山の野邊に旭旗を翩へせり、海に艨艟ありて火花を散らし、陸に數十萬の貔貅は故國の爲に戦ひぬ。

號外の聲、萬歳の叫、百民歡呼の海をへたてし彼方には、憂雲深く鑽して天上の玉座また地獄の釜たらんとす、而かもこれ同一球面上の光景なりき。

提灯行列を行ひ、太白を捧け、赤飯を喫し、國家前途の多望なるを夢想する時、見よ、君國に捧げし赤誠の血潮は、異國の雪を唐紅に染めなして、胡風霜に凍る戰場の冬を、傷負ひたる兵卒は枯れたる野菊を手折りてそが戰友の屍に手向けぬ。

いつの世か血と肉と骨とを犠牲とせずして、所謂文明を購ひ得べき、人生の終始は豈、北山の松樹

雪に臥して、熱帶の棕櫚樹の焼けたる岩上に悩めるを夢むに非ずや。

活きたる詩趣、吾人これを此處に見る。

一切の文明史は、吾人に語るにこの悲壯なる一面と共に、更に向上の途として文學、藝術、宗教の必要を以てせりき。而して向上の一途はたゞ無我の眞境に基礎を置きて、冥想、恍惚の一瞬、直ちに宇宙の大精神と同化すべきを以てせりき。

嗚呼人生の詩趣、吾人はこゝに殺伐なる悲曲に耳を傾くると共に半夜冥想の一面には常に和平榮光の福音を耳にす。千波万波の汹湧淒じけれど、千古靜平の水は深奥に湛然たるが如し。差別の世相はどこしへに殘忍の曲を奏でんとも、將た人生の一面にはたゞ無意味の血潮流れんとも、地球以外に立脚の地を得たる冥想の分秒は、殘忍の曲を轉じて歡喜の曲たらしめ、無意味なる血潮はこれを詩化して百花亂發の光彩あらしめむ。

古人謂はずや

心地の上に風濤なれば、在に隨て皆青山綠樹、

性天の中化育あれは、處に觸れて魚躍り鳶飛ぶを見る。

と、無我の眞境、これ人生を回顧して詩趣恍然たらしむる所以也。

四 結 論

物ありて詩趣存するか、曰く否なり。
詩趣を解するの識ありて詩趣生するか、曰く稍適し而して未し。

惟ふに冥想なき國民には自覺なく、自覺なき國民には詩趣なく、詩趣なき國民は死せるなり、死せる國民は一の物に過ぎず、活ける人生、豈物を以て甘んずべけんや。

吾人は天然を好む、吾人は哲學者を敬す、吾人は科學者を慕ふ、吾人は其他一切の人々を尊む。然れども吾人のこれを好み、これを敬し、これを慕ひ、これを尊む所次は、これを透徹して宇宙に於ける吾人の地位を自覺し、此自覺によりて無盡の詩趣を味ひ、冀くは彼の無我の眞境を憧憬して、人生を活如たらしめんが爲のみ。

今やすべての階級を通じて、野に叫ぶ天來の警聲漸く大ならんとす、由來冥想に奢なりし大和民族、由來志想に貧弱なりし華彩列島の御門の民。時ありて冥想一番、爾が頭上に粲然たる天降の詩神を拜せずや。

吾が觀たる社會主義

野 田 鴨 水

左の一文は、余が北辰會演説部の演説會に於てなしたる演説草稿の梗概なり。

余は社會主義に關して多くの智識を有する者にあらず、即ち、此の社會主義なるものが、如何なる宗教的信念より起りたるか、若くば如何なる哲學的思想より胚胎し來りたるかに關しては、余は到底適當なる解釋を與ふる能はず、且又、余は從來社會主義なるものに關して深き研究を爲したる者にもあらず、唯余は今、從來余が社會主義者の言論に、著書に、文章に、時に應じ機に際して見聞したる零零碎の智識より割り出したる、小なる余自身の觀察を吐露せんと欲するなり、三歳の童兒には三歳の童兒の觀察あり、人の言ふ如く眞理にして果して單純なるものならしめば、今將さに述べんとする余の單純なる觀察、將た必ずしも眞理を去る頗る遠きものと斷言し得ざるべきか、若し余の論する所にして誤謬あらば、余は謹んで諸兄の叱止を待たん。

余をして先づ社會主義に對する定義を下さしめよ、學者の見解によりて、社會主義に對する定義も種々あるべきならんも、余は左の定義を以て、最も正確に、最も簡明に其の何たるかを言ひ表はしたものと信せんと欲す。

「社會主義とは現代の社會組織に満足せずして更に現代よりも優れたる嚴正にして秩序ある新組織を興さんと主張するものは是也」

此の定義をして眞ならしめば、余も亦一個の社會主義者たるを免れず、何となれば、人誰か其の現時の境遇に満足し得るものあらんや人は必ず或る側面に於て事物の缺点を見出さざれば止まざる性質を有す、是れ實に貴ふべく喜ぶべき特質にして、此の特質ありたればこそ人類始まつて迄今幾千年、日一日、年一年、愈々發達進歩し來りて、終に今日の文明、今日の社會を見る所を得たるなれ、此の特質無かりせば、今日の人類は幾百千年前の所謂原始時代の人類と毫も異なる所無かるべきは、火を賄ふよりも明か也、此の意味より推さば人類は皆悉く社會主義者の一員也。

而も翻つて現時我邦に於て、吾人の眼にし耳にする社會主義者の主張と行動とは果して如何、無

論日本に於ける社會主義者も、此の定義の中に包括せらるるべきものたるには相違無からん、何となれば彼等は深く常人よりも一層深く現時我か國の社會組織に不満を抱き一擊今の組織を打破して以て、一個完全無缺の新組織を興さんとするものに外ならざれば也。

學者は言ふ、國家は一個の人格なりと、然らば古往今來歴史あつて以來、一個完全無缺の人格を見ること能はざりしこ同時に、己に一個の人格たる國家に於て、完全無缺を望まんは、是れ唯だ一個の空想に過ぎざるべきか、然りと雖も吾人も亦明かに現時我邦の社會組織の上に、多大の缺点あるべきは信じて疑はざる所也。

而も現時我邦に於ける社會主義者が此の缺点を矯めんが爲めに、果して如何なる方法を執りつゝあるか、彼等の主張せる主義、彼等の行動せる態度は、果して今日我か帝國の社會組織の缺点を矯むる上に於て、果して最上の方便なるや否や、此の疑を解かんとするは、余が今日こゝに立ったる目的也。

現今我か國に於て、自ら社會主義と稱し、世亦社會主義者を以て許す人々の中には、其の學識に於て、其主張に於て、又其の品性に於て、吾人衷心の尊敬を拂ふに價するもの、決して尠しがいふべからず、彼等は赤心國家を憂ひ、人類を愛する者にして、吾等は多大の感謝と尊敬とを以て彼等を迎へざるべからず。

然りと雖も、今日我邦に於て、主として社會主義を主張しつゝある人々の中には、吾人が斷じて賛同の意を表する能はざるものあるを認む、彼等は社會主義を誤解せり、否彼等は少くとも現時

我國の社會制度に於ける病弊の果して何れに在るかに關して根本的の誤解をなしつゝあるものにあらざるかを怪しむ。

彼等口を開けば即言ふ、労働者を保護せよ、資本家を仆せよ、富の平均を務めよ、労働者は資本家に虐待せらる、労働者は無力なり、労働者は社會の弱者なり、資本家は社會の強者なり、社會唯一の壓制家なり、故に労働者は助けざるべからず、資本家は仆さざるべからず、文明の進歩するに従つて、富の程度に大なる懸隔を來すは、自然の勢にして富の分配是に於てか起ると。

彼等は深遠なる學識と、巧妙なる論法とを以て、資本家の飽くまでも社會の爲めに惡むべく、資本家制度の決して社會の幸福、民衆の安寧に益あるものにあらざるを論じ、力を尽して労働者の保護を說き、貧民の救濟を論すと雖も、其の主とする所要するに下の如きに外ならざるが如し。

曰く資本家は仆さざるべからず、彼等は強きが故也、労働者は保護せざるべからず彼等は弱きが故也、富者は何故社會主義者の惡む所となり、貧しき者獨り社會主義者の愛護を得るか、彼等は曰く、富める者は強き者也、故に之を仆さざるべからず、貧しき者は弱き者也、故に之を保護せざるべからずと、彼等の念とする所、主として強弱の問題にあるが如し、強を挫き弱を扶くるの問題を解釋せざるべからず、世上幾多の資本家の中には必ずや社會主義者の敵視せる壓制暴虐、私利を營むに急にして、労働者の困苦缺乏に一点の同情をも拂はざる人非人もあるべし、とはいづれいかに極端なる社會主義者たりとも、世上幾多の資本家悉くが皆此の如き人物なりとは斷言し

能はざるべし、否多くの資本家中には必ずや天命を知り、人道を解し、愛憐と同情を以て労働者に對する人々無しとはいふべからず、人若し其の道を以てせば、天下の富を一身に集中するも何ぞ之を咎めんや、「汝等各強者となるべし」とは人の世始まつて以來、人類の日に夜に耳にする天來の聲にあらずや、資本家となつて天下の強者となるは、吾人各自の權利にして、社會主義者の與り知るべき所にあらず、終生勞働者となつて社會の下層に埋没し去らるゝ者は、一面より觀れば彼等自身の招ける罪にあらずや、社會主義者は口を極めて資本家の暴虐、壓制を論ずれども、汝等時には翻つて、汝等の保護せんとする労働者の狀態を觀察せよ、彼等は果してよく自己の職分に忠實勤勉にして、時だにあらば傭主の眼をかすめて、一時の安逸を貪らんとするが如き傾向なきか、彼等は果して飲酒、賭博等の不徳に耽るを以て人生最高の快樂となしつゝはあらざるか、汝等の主張せるが如く世界の資本家をして悉く暴虐壓制を事とする沒人道の徒輩なりと假定するも、彼等を仆して之に代ゆるに資本家の勢力を割き、之を得て野獸的傾向に陥り易き、彼の労働者なるものに與へんとするは、所謂毒を制するに毒を以てするもの、其の因つて來るべき結果や、前よりも更に悲しむべきものにはあらざるべきか。

要するに現時社會組織の缺陷を一に資本家制度、貧富の懸隔に在りとなし、之を救濟するには、唯資本家を仆し、富の分配を實行して新しき社會組織を興すに在りとの社會主義者の主張に對しては、余は唯だ其の根本より誤れるものたるを斷言するに憚らず、余は社會主義者の主張を見るに。一個詩人の空想を以てす、決して剖切なる社會改良家の着實なる議論と稱する能はず、其の

主義の實行を見るは、怖らく向後幾億萬年、地球滅亡の後なるべし。

又社會主義者の頭脳を支配せる主要なる思想の一は、人類平等の思想也、然り人類は或る一面より觀察すれば悉く平等也、人類の平等は確かに余の認むる所也、資本家も人間なり、労働者も人間也、富める者も人間也、貧しき者亦人間也、資本家若し生存の權利を有せば、労働者亦生存の權利を有す、富める者若し生存の權利ありとすれば、貧しき者亦生存の權利を有す、これは何人と雖も異議なく認むる所也、而も社會主義者の思想より推す時は、資本家も労働者も同じく人間たる以上、富める者も貧しき者も同じく人間たる以上は彼等悉く同等の賛澤を尽し、同等の財産を有し、同等の權利を有し、同等の自由を得んことを主張するものゝ如し、即ち一言以て之を蔽はゞ、彼等は總ての人類に同等の力を與へんとする也、此の思想たる、余を以て之を見れば、既に空想の域を過ぎて亂想に陥れり、亂想の二字奇なるが如しと雖も、余は社會主義者の此の思想を形容するに之に優りたる形容詞を發見する能はず。

先きに述べたるか如く、人類は或る一面より觀察して一切平等に相違無かるべし、又相違無からんことを希望す、而も翻つて靜かに裏面の事實を觀察せよ、人は其の母の躰内に在る時に於て既に差別を有す、敢へて高下の差別といはず、敢て善惡の差別と言はず、又敢て強弱の差別と言はずと雖も、兎も角差別あるは明かなる事實なり誤解する勿れ、余は決して王者の誂子を以て高しとなし、穢多の甚六を低しとなすものにあらず、富豪の子必ずしも貴からず、乞食の女必ずしも卑しからず、彼等は唯力最も廣き意味に於て、)に於て非常の相違あり、人は產聲を開戦の喇叭

として、人生の戦場に此の力の發展を務む、戦に勝ちたる者強者となり、之に敗れたる者弱者となる「人宣しく强者となるべし、點々使役せらる畜生なることを勿れ」（ロングフェロー）、他人若し進んで汝と同等のものとなれば、汝は更に進んで以上の強者となるべし、社会主義者の或るものか、人類をして悉く同じ力のものたらしめんとするは、是れ余が所謂一個の亂想にして、生存競争の理法を忘れ、人生向上の真想を洞見し得ざるものと言はざるべからず、

又吾人が現時我が國の社会主義者に見る一個特異の点は、彼等が人類の平和を願ふの余り、國家の存亡を度外視せんとするが如き態度あることはれ也、殊に我が帝國が強露と事を構ふるに當り、國民は舉國一致以て此の空前にして又恐くば絶後の難局に當らんとするに際し、彼等社会主義者の或る一部の徒が、冷然として一点の注意を之に傾けず、否反つて國家の處置を批難し、國家の行動を攻撃したるが如きは、當時に於て深く余の惡感を惹きたる所なりとす、當時或る社会主義者一社會主義者の中に就いても、最も有力にして識見ありと知らるゝ或る社会主義者の發刊に係れる新聞紙は、廳面も無く左の如き所論を公にせり。

「戦争は遂に來れり、平和の攪亂は來れり、罪惡の横行は來れり、（中略）平和攪亂より生ずる災禍に至りては、吾人平民は其全部を負擔せしめらるべし、彼等平和を攪亂せる人は毫も其の罰を受くることなくして、其責は常に吾人平民の肩上に嫁せらるゝ也、是於乎、吾人平民は飽くまでも戦争を否認せざるべからず、飽まで之が防止に盡力せざるべからず、速に平和の恢復を祈らざるべからず、之がためには、言論に、文章に、有ゆる平和適法の手段運動に出でざるべからず

す

故に吾人は戦争已に來るの今日以後と雖も、吾人の口有り、吾人の筆有り紙有る限りは、戦争反対を絶叫すべし、而して露國に於ける吾人の同胞平民も必ずや亦同一の態度方法に出づるを信ず云々」。

是れ實に怪しかる次第也、余は決して彼等か愛國心に缺如せりとの口實を以て、彼等を責めんとする者にあらず、彼等が余りに沒常識なるに驚嘆する也、人間が一個の社會的動物たる以上は、必ず一個の團体の一員として生活せざるべからざるは明か也、吾人は國家の國民を外にして、人類を認めずといふが如き、沒分曉の議論を吐くものにあらずと雖も、事實を以て事實を論ずるも、吾人は到底國家の組織を認めずして、安固にして秩序ある個人の生活を認むる能はず、目下の時勢に見るも、國家を外にして吾人の生存を認むる能はず、況んや人類の平和と進歩をや、社會主義者の此の思想は全く根本よりの誤謬を見るの外なし。

勿論四海同胞は吾人の理想にして又明かなる事實也、世界の人種が一個の根原より出でたることは、今日の人類學者及び醫學者的一致する所なりと聞く、然れども思へ、人類は其天性に於て、一方に神の如き性質を有すると共に、他的一方に於て惡魔の如き性質を有するにあらずや、現在殺し、肉身の姉妹相害ふが如き狀態に在る間は（社會主義者は之を以て社會組織の缺陷に歸す、あゝ口は調法なるかな）、四海兄弟は一個の理想として描き得べきも、此の四海兄弟の語を楯とし

て、國家の必要を認めず、國家の性質を誤解し、其の極、國家が今や一命を賭して、存亡の大局に臨むに當り、冷然、「露國に於ける吾人の同胞平民も必ずや亦同一の態度方法に出づるを信すと叫ぶに至つては、此の社會主義者の頑迷無識容易に濟度すべからざるを見る也。

吾人と雖も亦一日も早く四海兄弟の實を擧げ、此の地球の上和氣藹々として、春風永へに吹かんことは、吾人の切望して止まざる所なりと雖も、いかにせん、相手は既に故なく銃を擬して吾が胸を狙へるにあらずや、吾人は吾人當然の義務として、名刀一揮の下に此の敵手を仆さぐるべからず、其の敵の兄たり、弟たるは今此の場合決して問ふべき所にあらず、唯問題は吾が生命の保護に在り、生存は吾人第一の義務也。

我が帝國は、帝國生存の大義務のために、敵手露國と戰へる也、其の結果として幾萬の同胞が（勿論露國人民をも含む）血を流し、骨を曝せるは、吾人の最も痛嘆措く能はざる所なりと雖も、吾人各自帝國の臣民たる以上、個人の自由、個人の平和、個人の利益を犠牲に供して、極力國家生存のために盡すべきは言を待たざる所、何等の愚輩ぞ、今に當つて國家を無視してまでも、個人の生存を主張し、個人の平和を主張し、個人の利益を主張せんとはする。（三十七年九月）

家 庭 の 改 良

龍 山 北 川

夫れ戰爭は好ましきものにあらず、人事の凶事はすぐるものなし、見よ、幾多の生命幾多の金

幾多の時は之が爲め空しく犠牲させられ、見るに忍びざる慘状を呈する者に非すや、古來幾何の戰争ありしと雖も一として之を現實せざるものなし、殷鑑遠きにあらず、目下日露戰争は果して如何、我邦は何を以て此の如き無仁の手段を取りつゝあるか、言はずして知る、正義の爲め、人道の爲め、國家生存の爲めたるを、顧ふに我邦は開國以來二千五百有余年、鍊へに鍊へし大和魂の眞味を漏すべき好機を得たり、其蹈む所は正道、其行ふ所は正義、由來仁義の戰に敵はなし、戰勝の明々白々たること吾人の言を俟たざるなり、されど想へ、たとひ鋒頭の戰に月桂冠を得るも戰後の經營にして一步誤らんか、幾多の同胞が流血曝屍して得たる勝は忽ち水泡に歸せん、徒に戰勝の光に迷ひ其身のある處を忘るゝが如きことあらは虎を書きて眼を入れざるもの、吾人は戰勝の聲をさくとともに内にありて能く畫策して其光を永遠に保持せざるべからず、吾人が又經營すべきこと多々あるべしと雖も殊に急なるは德育の發展にあり、抑德育は智體兩育の根底たるべきものにして之れにして發達せざれば他は之を進むるも甲斐なきなり、我邦維新以來三十七年、されど未だ德育は比較的發達せず、歐米諸國に對して慚色なき能はざるなり、決して戰勝のみを誇りて他を忘るべきに非す、之を計るに先ち先づ務むべきは家庭制度の改良にありと信ず、是れより聊か迂筆を以て之を論及せんとす、

夫れ家庭の目的は何ぞや、固より其數多しと雖も之を詮じ來れば和氣を得るにありといふべし、若し家庭にして此要素を缺けは是れ家庭を存立する能はず假令其名存すと雖も是れ僞の家庭なり、一家は小なる國家なり、故に一家の波瀾は一國の波瀾の如く、一家の革命は一國の革命の如

し、家齊へて初めて國治まるなり、一家の社會に於ける責や亦大なりといふべし、果して然らは如何にして一家の成立を見るべきか、即ちいかにして家庭の和氣を保つべきか、吾人は生れながら各天職を有し、之をなすべき義務あるともに之を有する權利を持つ、故に或程度までは吾人は「フライ」なるものなり、是れ文明社會の常規にして何人も之を侵すを許さず、之に反して無法の壓制はあくまで之を除去せざるべからず、此論法を以て我國の家庭狀態を觀るに大に之に反するものあり、我國從來の家庭制度は唯壓抑を以て上策となし、家主たる一の「ティラン」の下に全家庭は服従すべき義務を有し、他に一として權利たるものを見むる能はざりき、是の制たるや、封建時代に於て戸主權の全盛を極め、婦女たるものは何の用をなすを得ず、たゞ産兒器に過ぎざりし弊より出でしもの、今に至るまで此餘風傳はりて十中八九の我國家庭を支配するなり、固より封建時代にては是れにて差支なかりしならんも、此文明燐々たる現時はいかにして此を默視するを得んや、是れ一見小事の如しど雖も、其裏面にひそめる勢力の大なる、速に之を改良するの要あるなり、

一國の壓制は愛國心犠牲的精神の發展を害し、家庭の壓制は和合の氣を損す、戸主には戸主權あり、婦には婦權あり、親には親權あり、子には子權あり、其間の秩序井然たるものにして決して之を侵すを許さず、故にたゞへ戸主の命と雖も己の權利を捨てゝ之に育従するの義務なし、かく稱すれば吾人は大に男子の權を制限し、女尊男卑説に賛するの傾向あるを疑はれんも是れ決して然らず、吾人の稱同する所は男尊女卑にもあらず、女尊男卑にもあらず、男には男相當の權あり、

女には女相當の權あるといふ意の男女同權論を主張するものなり、（世上所謂男女同權は全く同じ權利を有すべしといふが如しと雖も余のいふ所は然る意に非す）假令家庭中にありと雖も非理に隨ふべき從順（即ち盲従）を許さざるなり、現時の家庭は實に壓制の倉庫にして一として自由あるを見ず、實に現今の如き憐むべき子女、同情すべき婦妻に對して吾人は氣の毒の感に堪へざるなり、（殊に親子關係、夫婦關係に於て其度の著しきを見るなり、それ父慈子孝は萬古の大道なり、此法則たる、人生のあらんかぎり、否人道のあらんかぎり赫々乎として成立すべし、然るに家庭の壓抑の爲め父をして慈父たる能はざらしめ、子をして孝子たる能はざらしむ、又夫愛婦順は夫婦の常規なり、然るに夫獨り己れの權を揮ひ、婦權を侵害して婦を恰も奴隸視するの觀あるは目下の實狀にあらずや、是れ吾人の長嘆大息禁する能はざる所にして速に之を改正せんは國家の基礎を危くするの恐あり、或論者は之が改良策として親子別居論など稱ふるは又一理ありと雖も、愚見を以てすればかくの如き手段を用へずとも能く各自の權を知りて行は、圓滿の中に家庭を構成するを得んか、

世には父の酒錢を得ん爲め、身を賣る孝女あり、夫の煩惱を満足せしめんため、節を賣る貞婦あり、かゝることは決して珍らしきことに非す、昔にては近松等の院本に多く寫出せられ、近くは新紙の好種として日々之をあらはすに非すや、世はかくまでも夫權親權を用へざるを得ざることは實に恐るべきことならずや、かゝる奇女を出し、かゝる怪婦を産みたる社會は果していかなる社會か、危介なるは此社會なるかな、吾人は此等奇女怪婦の上に思ひ浮ぶる毎に同情の涙を禁する

能はざるなり、聞くならく歐米諸國中には婦人に政治的權利を得しものありと。吾人は思ふ、固より此の如きことは何の障ることなきが如しと雖も、婦人にはそれ自身の天職あり、又其他に男子に代るべき職なきに非ず、故に政治上の權を婦女に與ふる如きは其本質を顧ざるものといふべし、之を要するに吾人が家庭改良の手段として先づ各自權利の歸する處を明かにし、父は子の邪魔物させられず、子は父の資本餌食たらず、夫は婦の憂眼に接せず、婦は夫の奴隸視を受けず、愈々快々たる和氣の中に家庭を造らざるべからず、換言すれば慈父、孝子、愛夫、順婦、友兄、悌弟は是れ家庭の眞要素にして何人も能く此を實行せられんことを望んで止まざるなり、波斯王嘗て英にて「グラッドストン」老夫妻を見て曰く、「彼は五十年の生涯に唯一夫人を有し、我は五十の夫人を有す、而して今其福祉を比すれば余に非ずして彼にあり」と、噫又趣味ある談なるかな」以上は余が偶然感ぜしことを亂記せしに止り、其論する所吾人青年に直接なる關係なしと雖も、將來は皆家庭を造らざるべからざるものなれば今より能く此等のことを研究し、以て其家庭を造りし曉に於て之を應用せば大に益することあるべしと信す、是れ余が愚筆を弄して讀者諸兄の高眼を汚し、所以なり、

美的生活論

堀田相爾

(一)

子夏孔子に問て曰く、巧笑倩たり。美目盼たり。素以て絢をなす。とは何の謂ぞや。孔子曰く、繪事は素より後にす。と、子夏曰く、禮は後乎。孔子曰く、予を起す者は商也、始めて與に詩を云ふべきのみ。と。即ち禮は忠信の基礎ありて、始めて行ふべきを云ひし也。即ち美的生活は善の根本的基本ありて始めてなすべき也。

職業は少なからず。教師も、學生も、軍人も、官吏も、市中を徘徊する紙屑拾ひ、往還を疾驅する車夫、馬丁、等、一として職業ならざるものなし。試に片町の街頭に立て往來する人を眺めよ。北東行する者は淺野川大橋に至らん。南西行するものは犀川大橋に至らん。時としては然らずして新堅町方面に折れ行く者、或は廣坂通りに至る者、行く處、趣く處は異なれど落付く先に家なきはなし。同じく職業なれど大臣は大臣の邸あり。馬丁は馬丁の家あり。地位の異なるに従ひて、生活の異なるは由もなき事なりかし。

或大官ありき。邸宅は山の手の静けき所に在りて、役所よりは少し遠けれど馬車を驅らば一時間にして行き着くべし。巨大なる門を入らば左に馬車置場あり。右に玄關あり。玄關の式臺はよく拭ひてか輝ける事甚だしく之を昇りて右手の襖を開けば書生部屋なり。電鈴電話の設け一として備はらざるなし。左の障子を開かば長廊下となつて突當ると大階段は階上大廣間に通す。剪裁植込等一として善を盡し、美を盡さずといふ事なく、調度の類目も覺じるばかりなり。

主人は毎朝八時に起き、訪客に接し、十二時に午餐し、一時に出で、役所に至る。婦邸は大概六時、又は、四時、夜は家に在る事少なく、稀に居るときは、宴安に耽り、而して其外出するとき

は行方不明なるを常とすと云ふ。彼は彼の庭に如何なる花の咲くかを知らざる也。彼の居室の窓玻璃に映する巨木の如何なる木なるかを知らざる也。彼が車馬を驅りて行く時路傍の農夫が何をなしつゝあるかを知らず。云ふを止めよ。麥と稻との區別を知らざる事を。

家族集りて柑を破り、甘を嘗め、隣人の評、菓物の談をするの趣味を有せざる也。彼の庭は池を有す。其中、金鱗洋々として游泳するもの、園丁のみ之を知る。後庭に擊劍所あり。時に憂々の聲あるも、徒らに書生の筋肉を健ならしむるのみ。

商店ありき。驚くべし。早朝火の用心未だ柏子木を停めざるに、店の大戸は己に上げられ、中より現はるゝ者一にして止まらず。少なるは十二三才より長せるは二十餘才に及び、或者は道路を掃き、或者は板間を拭ふ。一は物品を並列し、他は帳場を整ふ。かくして當日營業の準備成る也。六時頃蛇の目汁にて朝餐を喫すれば、早や得意客の踵を次ぐあり。營々として終日是の如し、見よ彼等店員は賣品の價を知る。客の面貌を評するを知る。少しく進んで千代萩を知る。探偵小説清水定吉を知る。

彼等己に善的修養なく、又美的趣味なし。可嘆哉。

(一)

人知らずや趣味の必要なる事を。人事趣味なくは何ぞ其勞苦を醫し、又其愉快を増進するを得ん。趣味は實に文明生活に欠く可らざる物なり。愚なる哉。禽獸汝は趣味を有せざる也。賢なる哉人類。汝は趣味を有する也。人よ汝は趣味を失ふべし。然らば汝は禽獸たるを得ん。禽獸よ汝は趣味を得べし。

然らば汝は人たるを得ん。嗚呼樂カクをなすはそれ知るべし。始め作すに翕如たり。之を從つて純如たり。キヨウ。皦如たり。エキ。繹如たり。以て成る。周樂の趣味よく君子にして知るのみ。見よ。子貢は告朔の饋羊カタシマを去らんと欲せり。孔子曰く、賜や爾は其羊を愛す。我は其禮を愛す。と。禮の趣味は只君子にして知るのみ。

吾人は君子たるを欲せざる乎。君子たるを欲せざるは禽獸たらんを欲すると等し。人生轉展して極りなし。君子たらざれば小人。小人たらざれば君子。若し夫れ小人たらんとせば宜しく道をすてよ。道に戻らすして君子たらんとせば、必ず先ず君子の修むる所を修めざる可らざるなり。古來禮樂は君子の尙ぶ所、君子學に志して六藝を修めば、禮樂は其最たらばあらず。蓋し修養に必要なる之を以て最となせは也。禮樂はそれ趣味の一部にして「趣味は藝術の辨別なり」とは古人の定義する所にて、禮樂は勿論藝術の一部なるが故に、之を辨別するは趣味なる事明かなりと雖も今や文化の進歩甚だ急速、趣味も亦古の樂禮を以て論ず可らざるもの多し。因て余は今降りて現代の趣味を論せんと欲す。

(二)

諸君は廣阪通の邊に官衙の集まれるを見るや。或は縣廳に、或は議事堂に、或は市役所に、又は警察に昧爽霧を破りて到るもの、車聲殷々たるは高官なり。履屣石と摩して臺々たるは小吏腰辨の士也。尊卑各々卓につき、机に倚り、孜々勉むるもの、夜に及びて寺鐘沈々たらざれば止まず。高閣巍乎として、日々彼等を容れ、働かしめ、國は進み、世は益さる。彼等官吏の勞役實に多く

せざるを得ざる也。彼等は各々趣味を有せん。或は園芸、或は彫刻、時には繪畫、時には骨董、飼畜あり。植草あり。其種多くして尽くる事なかるべし。然れど余は其中官吏として如何なるを賞賛に値ひすべきかを撰ぶには頗る困難を感じざるを得ざる也。

勿論官吏は其出仕する官衙が其官吏に配分せる業務を完全に成就するを力むべきや必せり。園芸に耽りて徹宵し、其結果は晏起して課業の一部又は全部を欠くは吾人の最も賞賛せざる所、たゞへ趣味そのものに罪なく、之をなすもの、意志の薄弱に因る所多しと雖も、しかも猶君子は危きに近寄らざる也。若し他にこれより危からずして完全なる趣味ありとせば、吾人は比較的に前者を排斥せざるを得ざる也。

而して余の所謂後者の趣味は如何。其種類極めて多く、一々舉く可からず。然れども、一例として井上圓了氏の「英國風俗」中の一節を引用せしめよ。「日曜其他の休日には、一同教會堂に會して修身上の訓戒を受くるを例とし、村内の老若男女は午前若くは夜間の教會には必ず會堂に會し若し晴天の日には教會の終りたる後野外に散策し、年少の男女は野球蹴鞠其他の遊戯に快をとり、家に歸りては一同卓を同じくして食し、席を同じくして語り、一家團欒を以て無上の快とす。吾國の如く休日には料理店茶店其他の飲食店に入りて無益の遊びをなす風なし。平日には如何なる資產家も閑暇あらば書齋に入りて讀書するを樂しみとし、貴婦人は時々相會して音樂をきくを樂しむ。又紳士の間には時々學術に關する小會あり。余の宿せし家主の如きは羅典語に得意なるより毎週土曜日の夕の遊に羅典語に通するものを會して互に羅甸の詩歌を研究し以て無上の

樂しみとなし居り。」と。見よ彼等の趣味の道徳的にして又運動的なる。而して又研究的なる。眞に興國的なりと云ふべし。

(四)

興國の風は質實なり。剛健なり。潤大なり。勤勉なり。忍耐なり。余は絶對的に懦弱、畏縮、浮虛、纖細を排す。少しく極端なりと雖も、余は華美纖細の風よりも、むしろ猶、佛國中學生の守獄的生活をとる。左川氏曰く、「佛國中學の有様は、勿論嚴格なる規律に從へられ、只嚴肅一点張りの單調なものなり。生徒は各自、家より準備の品をもち来る。第一衣服、食事の手巾等、規定の數、金屬のコップ、櫛、刷毛、海綿、ステープ、等なり先づ寄宿舎の中或一箇の場所が彼れに交付さる。寄宿舎内には各自寝室を受くれを勿論贅澤なる筈なく、手箱一つ、と衣服を入れ、押入一箇あるのみ。一寮に付き四つより二十四迄の寝室あり。其中一つは監事が占め少年等は凡て此人の監督の下にあり。朝は監視の下に洗面し、服をつけ、パンとステープを食し、教場に出で、或時間には園や内庭にて呼吸する事を得一週に一度又は二度列を組んで、外出することあるのみ。夜寝も一定の時間に監視の下になし一同眠れば監事消燈す。」と。其慘たる驚くにたへたりと雖も、浮虛にして足の地につくを覺ゑざるものに比すれば勝る事萬々なり。聞く古の武は美を盡せり。未だ善を盡さず。獨り詔は美を盡せり。又善を盡せり。孔子詔を以て完なりとす。

要するに、内、德を修めて勤ならざれば、美的生活はなし得ざる也。嗚呼。現代に於て、美を語らざるものは全く乾枯し、美を説く者は全く之れに溺る。獨り中庸を得るものは美を盡し、又善

を盡すべし。之を眞の美的生活となむべ。



歴史的諺（承前）

浦井恒堂

譯
解

Neopolitan Feast(neapolitanisches Fest) 佛蘭王カロロ十世帝王神權說 (Divine Right of Kings)

保持し登極以來議會と衝突歟む時無く人心全く王室より乖離し終に一八三〇年七月廿七日の革

命となり先是同年六月ルイス・フィリップは其岳父ナポリ王の巴理に遊ぶるに際し之を彼のバレン
ーロワヤール邸 (Palais Royal) に招き盛宴を開く來會者皆近來に無き歡樂なるを稱すルイスフ
ィリオ苦笑して曰く汝かよいば實に Neapolitan feastにして吾曹は今や噴火山上に舞踏しつゝあ
るなり々 (Nous dansons sur un Volcan) 盖し以太利ナポリは有名なるマスピオ火山の所在地な
り此逸話に依り禍機の切逼せる悟らばして安逸を貪るをナポリ人の宴といふ

No money, no Swiss (Kein Geld, kein Schweizer) 一五二一年獨佛以太利を争ふや佛王フランシス
一世獨帝カロロ五世に因りツラノ城に圍まれ軍資既に盡き瑞西傭兵に給料を支拂ふこと能はず
乃ち彼等を放還して曰く No money, no Swiss (Point d'argent, point de Suisse) 此語より出
たる諺にして金が敵の世の中をいふ類なり蓋し瑞西の地たる國土狹小人口稠密なるを以て常に
人口過剩の虞あり人民好んで外國君侯の傭兵となり政府も亦た之を禁せず實に瑞西國の痼疾
オーバーフレーチン

たりされは著名のツヴァイングリを始めどし有志の人々は屢々此弊風を艾除せむことを努めしかども其効を見ず古來如何に多數の瑞西人が些少の金錢の爲め其身を賣り空しく外國の爲め鮮血を濺ぎしかはルイス十四世の軍務大臣ルーボアと瑞西使臣との間に交換せられたる應答を見て知るべし一日ルーボア王に謁し佛國が瑞西傭兵の爲めに支出する金額のあまりに大なるに因り之を削減せむことを請ひ且つ曰く陛下及び陛下の祖先が瑞西人の爲めに費し金額を合計せばクラオン金貨(我十圓)を以てパリよりバーセルに達する道路一杯に敷き詰むことを得可しと瑞西の公使 Stuppa 之を聞き直に反駁して曰く嗚呼君は其一を知りて未だ其二を知らず我國人が貴國の爲めに流し鮮血を以てすれば巴理よりバーセルに至る運河を充たすに足れりと

Not an inch of our soil will be cede, not a stone of our fortresses. (Frankreich trete keinen Zoll breit von seinen Boden, keinen Stein von seinen Festungen ab) 一八七〇年九月佛國政府が歐洲列國に向うて發せる通牒の句なり先是一八七〇年九月一日ナポレオン三世はセダンに於て其叔父ナポレオン一世がワーテルローに於けると同一の運命に遭遇し見兵八萬を以て獨軍に降る此の報巴理に傳はるや全市沸騰して帝政の顛覆となり留守皇后エウジニアの英國出奔となり人民は共和政府建設を宣言し九月四日新政府の組織成る之を國防政府といふ將軍トロシュー總理となりフハーブルは外交に當りカムベタ内務の椅子を占めたり不幸にして當時國防政府を組織せる諸名士が義勇の志に富めるは十分歎賞の値ありと雖も彼等は從來野に在りて專ら政府を攻擊するを事とし實際の政務に就きては絶えて經驗を有せず故を以て國防政府は其創立の最初より

幾多の大失策を爲し大に佛國の不利益を招致せり其一は九月六日を以てフハーブルが歐洲列國に向うて發せる通牒にして其大意に曰く初普王は宣言して曰く我敵はナポレオンにして佛國の人民にあらずと（是はフハーブルの虛構にして普王の宣言の意は武装せる佛國軍隊を敵とし交戦するを目的とし佛人を敵とするにあらず普國軍隊は決して佛國の良民を犯さざるを以て佛人は安して其業を營むべしといふにありき）然らば今やナポレオン既に殞る普王は宜しく速に其兵を撤すべきなり獨人にして始の宣言を忘却し佛國領土に對して野望を逞しうせむとなれば佛國は極端まで抗戰するの覺悟なり佛國は其版圖内の一寸の土と雖も其城壘の一塊の石と雖も誓うて之を敵國に割譲することなかるべしと此揚言は如何にも壯烈にして佛國人の大喝采を得たれとも外交上の一大失策にしてフハーブルは愛國の熱情のために驅られてかゝる輕躁なる宣言を發し佛國の爲め一大不利の結果を喚起せり何んとなれば歐洲諸國は此戰役の初期に於てはナポレオンを以て故意に獨逸に對し挑戦せる者と認め獨逸に向うて同情を表せしが獨軍の戰捷と共に歐洲の輿論一變して佛國の敗衄を憐むの情と爲り英國の如きは佛國の爲めに奮うて居中調停を試みむとせる際なりしに此輕躁なる通牒の爲め列國は到底媾和の望無きを悟り佛國の爲め外交的援助を與ふるを斷念したればなり

No storm is so dangerous as a calm, no enemy is so dangerous as having none. イエスイタ社の創立者イグナチウス・ロヨラの語にして小人閑居不善を爲し敵國外患無くんは國殆きを戒めたる者なり

Nulla dies sine linea (No day without a line; Kein Tag sei ohne einen Strich) 羅馬の學者アリニウスの所傳より諺となれり希臘丹青家の泰斗を Apelles といふアレクサンдрル大王の父アレクサンドルに因りマケドニアに招致せられ殊に歷山の寵を受けたりプリニウスはアペレスの勉強を記して彼は一日少くとも一線を引くべかことを法則と定め之を厲行したりといへり此語に因り勤勉をいふ諺となれり

Owls.—To bring or send owls to Athens (Eulen nach Athen tragen) 無益の事を爲しむだ骨折を爲すといふ特に商機に汎なる商人が市場に過剰なる商品を更に取り寄する愚を嘲ける語なり是諺は極めて古く古代希臘より行はれたり蓋し鷗は夜間能く物を觀るを以て古人は之を以て智慮の代表とし以てアテネ市の守護神ミネルバの代表とせり而してアテネに於ては獨り鷗が尊敬せられたるのみならず附近の林中に鷗の棲むこと著しく多かりおれば此アテネに鷗を珍らしげに持ち來たる者の愚を笑ひしなり之れと全く同意の英國に行はるゝ諺に曰く To carry coals to Newcastle ニーカッスルはノーサンバーランド州なる著名なる石炭產地なり其地に他より石炭を輸入するの愚をいふ又獨逸の諺に Wasser in den Rhein tragen といふあり支那の諺に湖上鬻魚といふあり

Pandora's Box (Büchse der P.) 希臘の神話より出で災害を包藏せる音物若しくは譲與なり太吉神人無別の世にプロメテウスといへる巨人あり大に人類に好情を表し天に昇り火を携へ來たりて之を人類に教へ人始めて火食の法を得たりゼウス神大に之を惡みヘラエストス神

炭を輸入するの愚をいふ又獨逸の諺に Wasser in den Rhein tragen といふあり支那の諺に湖上鬻魚といふあり

Panic (panische Schrecken) パニは希臘の森林牧畜の神にしてゼウス神の子なり其生まるや頭に角あり口邊に長鬚叢生し鼻は曲りて鉤の如く尾あり其脚は山羊の如し長してベロボネソスのアルカデアに於て牧羊を爲し常に洞窟に住み山林谿谷の間を逍遙し天女と舞蹈して樂めり古人はパン神が非常に人を驚かし失神せしむる能力あるを信せしがヘロドタスに依れば波斯戰爭のマラトンの役に於てパン神は大に波斯人を驚かして希臘人をして奇捷を得しめ又サラミス海戦に於ても希臘人はパン神の冥護を得たりとは傳説に因り軍隊中に時として發する恐怖をパニック (恐慌)といふ近來は經濟界其他に於ても盛に恐慌の字用ひらる羅馬に於てはパンと同種の神を Faunus といふ森林中に在りて時に雷の如き笑聲を發し行人の喫驚するを見て樂めり因りて Faunie laughter (faunische Lachen) の語あり

Pax Romana (Roman Peace) 時津風枝を鳴らす治世をいふ古羅馬の神に Janus といふあり元は光の神なりしが後凡ゆる元始終末の神となれり最も古き貨幣に見えたるヤヌス神の像は前後

に面あり蓋し過去及び未來を洞察するの力を有するの意なり又古き立像の一には右手に三百左
手に六十五個の小石を持てり蓋し一年の日數を示す他の像は右手に笏左手には一個乃至數個の
鍵を持てりこれヤヌスは天の門の開閉を司り日輪の出つる時と沒する時とに日輪の門を開閉す
るの意を示す而して數個の鍵を携ふるは渠は獨り日輪の門の開閉を掌るのみならず天の諸門を
盡く取締るの意なりされば羅馬人は如何なる神を祈る時も先づヤヌスの名を呼びて開門を請ふ
習なり然らば祈禱の聲は目的の神に達せざるを以てなり Janianus の月に於て此神を祭る
是より January の月名出たりスマ王の時羅馬市の公會場 (Forum) 附近にヤヌス神廟出來した
が其建築は頗る奇にして正方形を爲し四方に扉あり各面三個の窓あり是れ四季に擬し一季に
三ヶ月あるの意なり羅馬に於ては戰時には此堂に詣る門を開放すれども平和の時は門を鎖すこ
れ戰時に當りヤヌス神は羅馬の爲め出戰するを重す者なり羅馬は前後八百年間に於て僅に六回
ヤヌス神廟を鎖したるのみ此神廟閉鎖を Pax Romana 云ふ

Pegasus To mount his Pegasus 希臘神話に依れば Medusa よじふ獰貌を有し其毛髮は小蛇より成れ
る女怪 (Gorgon) ありあまりに其面のたそろしまため之れを觀る人は立ろに石に化すといへり
アテネ神は勇士 Perseus に之を退治すべしことを命し渠は直接にメヅサの面に向ふを避け其盾
にメヅサの面を反映せしめ之に頼りて終にメヅサを殺せりメヅサの創傷よりは鮮血滾々として
涌あ出しが其内より一頭の駿馬躍り出て昇天し後ヘリコン山に降りてミューズ (文藝技術を
司る女神) の乗用となり Pegasus の名を得たり因りて後世詩を作るをペガス、に乗るといふ

Pen is mightier than Sword 紀元前七世紀の末葉に於てスバルタメセニア間に第二次交戦の事あ
り初めメセニアの貴族にアリストメネスといふ者あり第一次メセニア戦役に於てメセニア人の
敗衄となりスバルタの爲め獨立を奪はれしかば慷慨悲憤の情に耐へずスバルタ人を掃蕩せむこ
とを謀り終に國民を鼓舞して義兵を擧げ屢々スバルタ人と戰ひ大に智勇を顯はしければ國人渠
を推して國王と爲さむとせしも渠は之を固辭し唯だメセニア人の主將たるべきことを承諾せり
其後アルゴス。アルカデア。シキオン。ピサ等諸州は常にスバルタの勢力伸張を妬みしかば兵
を送りてメセニア人を援け其勢日に旺盛となれりスバルタ人大に苦み使をデルフォイに送りア
ポロ神の託宣を仰ぎしに主將をアテネに求めよとの神託ありければ更に使をアテネに派し懇に
デルフォイ神託の由を述べ主將として適當の人を送らんことを請へりアテネは大にスバルタの
發達を憚りしを以て彼等に有力なる援助を與ふるを悦ばずと雖も神託に背かんことを畏れ故意
に跛足の學校教師 Thetis を送れり然るに案外にも此人大にスバルタの用を爲し盛に勇壯なる
軍歌を作りてスバルタ人の勇氣を鼓吹しければスバルタ人も勇氣を回復し終にメセニア人を敗
り全國を占領するに至れり此逸話に因りてペンは劍よりも有勢なりとの諺出で人口に膾炙する
に至りたるが近來の研究に因れば此逸話は好事者の捏造に出でたること疑無くチルテオスはス
バルタの人にしてアテネ人にはあるざるべく今日に殘れるチルテウスの詩は純然たるドリア調
にして決してアテネ人の作と認むるを得ずと云ふ

兼備の將 Odysseus の妻なりオデセウスがトロヤに向ひ本國イタカを出發してよりトロヤ陥落に至るまで早くも十年の星霜を過ぎしがトロヤ落城の後本國に凱旋せむとせしに神は之を許さず先づ暴風のためトラキア海岸に漂着せるを始めとして更に十年間諸所を流浪し數多の辛苦を嘗めざるを得ざりき勿論始て神託ありてオデセウス一度イタカを出てなば歸らること二十年に及ぶべしとの事なりしかばオデセウスはトロヤ役に參加するを欲せず偽り狂しけるがアガメムノン等の諸將オデセウスの從軍を勧誘せむとてイタカに來りし時其假病なるを發見し終に從軍せしむるに至りしなりイタカに於てはベネロープの美貌仇となり數多の求婚者顯はれ甘言以て其志を奪ふ能はざるを見るや暴力を以て來り迫り身危しベネロープ乃ち一策を案し彼等に告げて曰く吾夫既に歸らること二十年一片の音信だに無ければ其生死知るへからず妻は心を決して君と婚儀を舉ぐべしわざと妻は老父ラエルテスの爲め壽衣ショラウドを織らんことを欲し未た果さず妻に假すに此衣を織り終るまでの時日を以てせよと乃ち晝間織り上げたる分を夜に至りて竊に解きほぞけり求婚者はベネロープの作業の一一向進捗せざるを訝りて止まず終に其秘密を發見して憤ること甚しき急に之に迫り進退既に谷まる偶然其夜オデセウス歸還しベネロープは虎口を免るを得たりといふ此傳説に依り人の事を爲して進捗せざる時はベネロープの織物に似たりと云ふ

Peter and Paul: Robbing Peter to pay Paul (Dem Peter nehmen und dem Paul geben) 一方より取りて他に與ふ一方より借金して他に拂ふ所謂借金政略をいふベテロ及びバウロは十二使徒の

中の中の聖徒にして此諺は中世時代の僧侶間に行はれたるを始とす蓋し當時の俗新に寺院興るも世人の渴仰を得べキリスト始め古聖徒の遺物等無き時は古き寺院は其所藏の寶物を分與するを常とせり古記録に依ればフランク王ダゴベルト(六二八年殂)菩提寺としてセント・デン(St. Denis)を興すや王命を以て各寺院より所藏の寶物を寄贈せしめたりき其他此種の實例舉くる遑あらずされば既に其頃より此諺の生せし事を見ゆ

Pipe of Peace: To smoke a pipe of peace (Mit jemand die Friedenspfeife rauchen) 打ちとけて談合するゝ所なりアメリカ印度人は最も喫煙を好み種々の彩色を施せる木製の長煙管は土人社交上必要品なり例へば土人の部落間に交渉問題發生して外交談判開始の模様を觀るに該部落の酋長は先づ長煙管を取りて靜に數服を喫したる後之を相手部落より來たれる使節に授け其喫し終るや次席の者に渡し談判の繼續する間は煙管は絶はず席中を廻り居るなりされば歐洲人が米國に來りて後土人と交渉する時も亦此俗行はれしかば大に歐人の好奇心を喚起し此諺を生ずるに至れり

Policy of Felix Austria(Extention of territory by nuptials) 獨逸帝フレデリキ二世(一四四〇—一四五九二二)及び其子マキシミリアン一世が行ひたる結婚政畧より出づ皇帝フレデリキは皇嗣マキシミリアンをしてブルグンド國の繼承者たるべキ公主マリアを娶らしめしかば一四七七年ブルグンド公カロロ猛公の歿するや其所領不ーテルラントとフランシックコンテとはアウェストリア家の有となれり尋いでマキシミリアン帝は皇儲フィリポ美公をしてアラゴンカスチリア聯合王國

(西班牙)の繼承者ヨアンナを娶らしめしかば皇孫カロロに至り 西班牙及び獨逸兩國に君臨するに至りアウストリア家は一兵に嗣らずして龐大の版圖を有すること、なれり 因りてホンガリア國王マチアスコルビスは聯句を作りて嘲りて曰く

Bella gerant alii, tu felix Austria nube.

Nunquae dat Mars alii, dat tibi regna Venus. (拉丁)

其意他國は戦鬪に因りて得る者を汝幸運なるアウストリアは結婚に因りて得ル 他人にはマルス(軍神)の授け給ふ者を汝にはマヌス女王(戀愛の女神)與へ給へりといふにあり此歌の前句なる

Poland: Polish Diet (der polnische Reichstag) = a reign of confusion Polish household (Eine polnische Wirtschaft) = a disorderly household. 此兩句は共に十八世紀末葉に於けるポーランド分領前の同國の憐むべく狀態より出でたり此國は露獨の間に狹まり北はバルト海より南は黒海に達し其版圖現今のフランス國の約三倍に及ぶる大國なりか われル此國の貴族は私利を圖らんが爲め荐りに王權を侵害しければ國王は虛器を擁するに過るべくして國家的組織は全く之歛し貴族の跳梁甚しく人民炭塗の苦に陥り寧ろ外國の所領となむことを冀望するに至れり殊に同國國會に於ては Liberum veto ルルベ驚くべき制度行はれル是は民權主義を極端に應用せし者にて議員の一人 nie pozwalam (I do not allow it) ル發言する時は議事を進行するを得ずさればポーランドに對しレ野望を抱懷せる諸外國は議員を買収して已に不利なる案の成立を妨害するを常とせり而し

て如此制度に適したる對症療法として反対者は Szlachta といへる我國の壯士類似の一派を利用して政敵を脅嚇するあり其狀言ふに忍びず要するにポーランドの末路に當りては凡ゆる秩序紊乱を極めたりル則ち今日に至るまでポーリンの語は秩序紛亂の形容詞となれるなり

Poland is not yet lost (Noch ist Polen nicht verloren) まだ望がある (still there is hope) の意なり是ば波蘭人の軍歌より出でたり一七九三年ポーランド第二次分領の後ポーランド人の敵愾心大に發し著名の志士コシワーシコは國民を勵まし領土恢復に盡瘁せしが一七九四年十月十日マチコビツの戰に於て露軍の敗る所となりコシワーシコは創を蒙り擒となれり傳へいふ渠が負傷して落馬するや絶叫して曰く Finis Poloniae (The end of Poland) と此語は後人口に膾炙し絶望を表する語となるに至れり後世の研究に因れば此逸話は同年十月廿五日の獨逸新聞ジユードブロイジッショウアイツングに因りて傳へられたる者の如しポーランド人は深く之を遺憾としガルをいひコシワーシコの語に答へたりの後コシワーシコは書を佛國の史家セギューアに送りて渠の冤を辯して曰く彼の言の如くは一私人の身を以て國家に擬する者にして何人の口より發するも僭越の罪を免かるべからず況んや予は決してかゝる暴言を吐きたる事なしとへり其事の眞偽はわざれ此語や既に世界に喧傳せられ復た如何ともすべからず

Policetes' Ring (Der Ring des Polikrates) ポリクラテスは小アジアサモスの僭主なり其兄弟二人を或は殺し或は逐ひて獨り政柄を掌握し多數の外國傭兵を以て自ら守り海には百隻の艦船を浮べ

漸を以てミレトスレスボス諸市を蠶食し終に西亞細亞の一大海國となり多島海の海權を握れり内は希臘本國より名ある詩人美術家を招致し宏壯なる宮殿を興し學藝を獎勵し大にヘラ神廟を修築して古代建築の一摸範と爲せり彼はエジプト王アマシスと同盟を締結し新興のペルシアに當らむことを努めしが後ペルシアの知事オロテスの甘言に欺かれてマグネシアに赴き其殺す所となり傳説に因れば埃及王アマシスはプリクラテスのあまりに幸運なるは却て禍源たるべきを慮り彼に説きて彼の最も大切に爲せる何者かを放拋せしむプリクラテス之を一理ありとし名工テオドロスの作れる貴重の指環を取りて之を海中に投せり幾もなくして漁人の魚を獻する者ありプリクラテス命して其腹を割かしめしに曩に失へる指環ありきアマシス大に懼れて曰く如此の人それ終に天譴を免る能はざるべしとプリクラテスと交を絶てりと云ふ此逸話に因りて俗にいふトン／＼拍子に幸福なるをいふ諺となれり

Poverty with an honest name is more to be desired than wealth 紀元前三世紀の末葉に於けるタレンツム戰役(二八二一一七二羅馬とエピロス王ピロスとの交戦)に際し羅馬人は使をピロス王の許に遣はして捕虜の交換を求む議政官 Fabricius 使者の首たり渠は顯職に居る事雖も家甚だ貧しく一個の小盃を除き家中絶て銀器なく其女嫁せむとして資なく國人相議し國庫金を出して婚儀を終らしむるに至るピロスは羅馬の使者來るを聞き厚く之を遇し懇親を結ぶを名としてフアブリキウスに許多の金を贈り歸國の後ピロスの爲め斡旋する所あらんことを請ふフアブリキウス受けずして曰く予は不義にして富まんより貧にして正直ならむことを樂むとピロス其人物を高しと

し更に其度量を試みんと欲し明日大象を已の室中に匿し フアブリキウスを招き共に語る既にしてピロス其侍臣に目せば忽ち巨象帷帳を排してフアブリキウスの背後に現はれ吼聲雷の如く其長鼻をフアブリキウスの頭上に挺出すフアブリキウス毫も驚愕の態なく顧みて象を微笑てピロスに謂て曰く昨日贈遺の金に眩せず何んぞ巨象を怖れんやとピロス歎服し悉く羅馬人の要求を容れ其俘虜を送還せりといふ

提婆傳

香周南

高等國文の中に宇治拾遺物語の抜萃の一節に「提婆菩薩龍樹菩薩の許に參る事」と云ふ條ありて予輩今此の提婆の傳を紹介せんとす又茲に掲出せる彼の年代は釋迦入滅(死後八百年の頃九世紀)と見て差支なかるべく釋迦入滅の年代に就ては諸説一定せざれども暫らく我が師文學博士前田慧雲師の説に従ひ周敬王四十一年(西紀前四七九年日本懿德天皇三十二年)

提婆は南天竺の人にして釋迦の滅後八百年の頃(即ち支那三國時代)に生る其名は伽耶提婆と稱し羅什は之を譯して小目天と云ふ又阿梨耶提婆と云ひ玄奘は之を聖天と譯せり性明敏衆人に異なる處あり壯にして佛教に歸し當時錚々の聞にある龍樹の門に入りて更に其奥旨を極め彼の持論たる諸法皆空論を傳へたり西域記に彼が龍樹の門下に列せるの模様を叙して曰く茲に龍猛^{ナカアヌナ}あるは龍樹の別名なり

時提婆菩薩自三執師子國來求論議謂門者曰幸爲通^レ謁門者遂爲白龍猛雅知其名盛^ニ滿鉢水命弟子曰汝持^ニ是水示^ニ彼提婆提婆見^レ水默而投^レ鉢弟子持^レ鉢懷^レ疑而返龍猛曰彼何辭乎對曰

默無レ所レ說但投ニ針於水ニ而已龍猛曰智矣哉若人也知レ幾其神察微亞聖盛德若レ此宜ニ速命レ入對曰何謂也無言妙辯其在レ是歟曰夫水也隨ニ器方圓ニ逐ニ物清濁瀾滿無間澄湛莫レ測滿而市レ之比ニ我學之智周ニ彼乃投ニ針遂第ニ其極ニ此非ニ常人ニ宜ニ速召進ニ而龍猛風範凜然肅物言談者皆伏抑レ首提婆素挹風徽久稀請レ益方欲レ受レ業先聘ニ機神ニ雅懼ニ威嚴ニ昇堂僻坐談玄永日辭義清高龍猛曰後學冠ニ世妙辨光前我惟衰耄遇ニ斯俊彦ニ誠乃寫瓶有レ寄傳燈不レ絕法教弘暢伊人是賴

と以て龍樹門下の俊彦たるを知る『宇治拾遺物語』の文は此の文意を叙したるものならんか

抑も龍樹一派に傳ふる諸法皆空論とは何ぞや之を一言せしめよ宇宙の諸現象を否定する法門即ち是れ

凡そ吾人が罪惡を作りて迷沈するは其原因を尋ねるに執着なるものにあり即ち我と云ひ法と云ひ實際確固的實在せざるものに對して常にあるものゝ如く考ふるに起因せり之を我法ニ執と云ひ此の二執を破し盡したる處に於て不可得不可說絕對無邊の眞理顯はるゝものなり之を破邪顯正と云ふ

元來吾人自身の体に就て考へ見よ精神と肉体との二者とせんか其肉体なる者は果して個人的に徹頭徹尾實在せるものなるや吾人の身体は是れ確固たる一物質にあらずして種々の元素集まりて之を組織せるものにして其元素たるやこれ宇宙に遍滿して敢て甲乙個人の差別なかるべし故に其身體は個人的に成立せるものにあらずして宇宙的に出來たるものなり更に進んで動物は他の動物の肉を取り他の植物を食ひ又植物の吐く酸素を吸ひて自己の体を養ひつゝあり又植物は動物の洩ら

す炭素を以て發育するは何事ぞこれ其抱合する元素か宇宙に遍滿して動物も植物も同一に宇宙的に成立せるの故なるべし又精神の方面に就ても個人的にあらずして宇宙的なり甲乙兩者の間に精神的感通あるは其證にして今日醫術に於て説明を完全にせらるざる彼の催眠術の如き或は之を認むべきか然らば吾人の精神及身体に就て確固的に我れと常一に執すべきものあるまじきなり山川草木亦一として確固的實体あるものなくこれ宇宙的のものゝ抱合に過ぎざるなり

斯く肉体も精神も俱に宇宙的にして個人的ならざるものを恰も吾人が個人的の如くに感ずるは何ぞ云ふに是れ萬有の生起する因縁に差別あるが故に精神身体に差別あるによりてなり例せば水が冰となり雪となり雲となり雨となるが如し若し萬有をして盡く自性自身あらしめば因縁なるものを待たずとも本然として生起せざるべからず然るに盡く因縁なるものにより現出生起するものは是れ自作自體の確有なきなり之を以て空と名づく山川草木盡く皆然り而して其個人的現象を組織する所の元素及び因縁即ち元素抱合の事情を作る處のものは實有なりやと云ふにこれ亦因縁和合より生ずる所に外ならずして其體實有することなく畢竟空なりとす之を諸法皆空と云ふ斯の如く一種の宇宙否定論を稱へたるものなるが其空とは如何なるものなりやと云ふに空亦復空と稱し空と云ふものも亦空なり即ち吾人が心念上に浮ふが如きの空とは超絶したるものとすとも吾人の空とは有に對するの空なれば空に空の相を求むるが故に畢竟これ有の念を離れず是を以て一切悉く之を拂ひ去るなり而して空亦復空と説く所には居然として妙有の義を含めり即吾人一切の主觀的誤謬を拂ひ盡す處に萬有の先天的真相が燦然として顯はるゝこと暗雲を除けば玲瓏なる

満月の沖天に懸るが如し之を宇宙萬有の實相とすされば今日吾人が世間の主觀的誤謬の一切を拂ひ盡して眞實の宇宙の實相の顯はれたるを涅槃と云ふ即ち佛とは此の涅槃の妙理即宇宙の實相を窮盡せるの覺者なり故に妙法蓮華經に説て曰く唯佛與佛乃能窮盡諸法實相と然るに提婆は其妙有の義をば説かずして一切皆空の一面をのみ宣傳せるは畢竟吾人の主觀的妄執を拂ひ盡すに力めたるを以てなり

彼は斯の如きの持論を以て佛教以外の外道及び小乘教徒『小乘の一派には彼の主意に抵觸するの思想あり然れども今詳述するに遑なし』に對して破邪顯正に力めたり常に非常の勇氣を以て外道の徒と論戰し之を對破して佛教を宣揚し三ヶ月間に改宗して彼に歸するもの萬を以て數ふるに至れりと云ふ常に外道に對するや之を説服せんば止まざりき論戰に臨むに先ちて曰く我汝に勝たんば汝我が首を切れ汝我れに勝たんば我必ずしも汝を斬ることを望まず我が門弟となれと此の如く常に勇を鼓して論戰せるを以て如何なるものと雖も一日を支ふるものなく皆降伏せり然るに或る日一凶徒に遇へりそは曾て提婆の爲めに論戰降伏せられたりし或る外道の弟子なり彼刃を揮て提婆に迫りて汝は我か師を智を以て伏せり我は今刃を以て汝が腹を破らんと突然彼の腹を刺し臓腑逸出す然るに提婆泰然として彼の狂愚を哀れみて曰く汝我が衣鉢を取りて急に立ち去れ我か弟子未だ道を得さるもの若し汝に遇はゞ必ず相執し或は王に送り汝を困めんこと少なからざるべし夫れ身名は衆患の根本たり汝今迷惑す是故に自らよく防護すべしと急に走り去らしむ既にして門弟相會し此様を見て驚怖し悲泣し或る者は直ちに要路を截ちて兇徒を求め仇を報せんとす提

婆之を止めて曰く諸法本來是れ空にして我々所なし害する者あることなく害せらるゝものも亦なし誰をか親しみ誰をか怨みて惱害を爲さん等と云ひ終りて從容死に就けりと云ふ

彼の著作の今日に傳はるもの數部中に百論は其最なるものにして龍樹の中觀十二門論と共に三論宗の寶典たり（此に支那譯として羅什、符秦の）

嗚呼提婆死して茲に千數百餘年彼の最期の教訓は千古の教訓たり徹頭徹尾自己の主義に従ひ主義の爲に仆れ主義の爲に満足す主義の人とは蓋し此人にあるか此人にあるか（終り）

小 言 三 則

隱 君 子

學校は一部二部三部を通じて語學を除く外はすべて皆筆記制度で、一切教科書を用ひないと云ふも可なりである。それで、僕達はまるで筆生か何かの様な有様にあるのである。僕熟ら考へて見るのに、學校は何か故に筆記制度を採用して居るか聊判断に苦しむ次第である。併し筆記制度必ずしも全然悪いと云ふ理由ではないが、その講義が充分理解せられて僕達の頭に這入るか否やについて考へ及ぼしたならば、僕達は殘念ながら充分理解せられると答へるに躊躇せざるを得ない。今一例を擧げて見れば或る先生は時間の初しめから終るまでブッ通しに講義せられる。それが一瀉千里の勢でやられるのであるからたまらない。腕は弱る頭はボーとして時間の終りに於てその何を學むだかサッパリ分らぬ様なのがある。又或先生は講義の原稿を朗讀せられる、これもその

速度の迅速なのでまいる。一生懸命筆を驅つても元來速記術を心得て居ない僕達には左様に速に筆記する可く出來がたくあるので、ツイある字を忘れたとか又は聞き落したとかで考へてでも居やうものなら其の内講義はドン々々進むと云ふ風で一時間少くとも六七頁は實に息を吐く暇もないものである。こう云ふ風では實際の處器械的に手と耳とを働かせるばかりで得るところ皆無（少くとも其の時間中は）と云ふ可きである。

そこで僕は考へるのである。寧ろこう云ふ風の講義法は全廢して一切教科書によることにしたらばドーであろうか。必ずや勞少くして効多からむと思ふのである、翻つて考へて見るのに何故に學校はかく筆記制度を探るか、或者は曰ひく、一部のものは大學へ行つてからの筆記の下稽古である。又或者は曰はく、二部三部のものは教科書に充つ可き適當の書籍がないからである。あゝ大學に行には法科の人は必ず筆記になれて居なければならぬか此れが抑も分らないのである。今一步を譲つて大學に於ては是非筆記なるものか必要不可缺ものであるとしたらば僕はクラスに一名の速記専門家を出席させ講義は細大洩らさず此者に筆記せしめ而して學生は悠然講義に耳傾けることが出来る様にしたならば宜敷と考へる。何も數十名若くは數百名の學生が一齊に鍛筆を走らしてノートを作る必要はあるまい

次ざに僕達高等學校の生徒が用ゆ可き適當な教科書がないために筆記制度を探るとならば僕は此れに答へんに、何故先生自ら奮つて適當の物を著はされないか、又あながち完全無缺のものを求めすとも比較的適當と見る可きものを採用して此れに修正増補を行つたら充分であろう

又別法としては毎時間講義せらるゝ分を印刷若しくは塞天板に附して生徒一般に頂戴することとなれば至極好都合だと考へる。

初しめて學校へ這入つたものは筆記の餘りに多いのに驚くのである又中には先生の講義が餘りに早いので不得止學校では鉛筆にノートの走り書きで家に歸つて清書するものも多い様に見受ける復習と云へば或は復習かも知れぬが實につまらない時間の消費である。何となれば學校にありては筆記の爲めに充分講義を理解する能はず。家に歸りて此れを清書する爲め徒らに時間を消失す。僕達時間に生活するものにとつては實に多大の苦痛である。

若し筆記制度が飽迄も必要なるものならは何故に小學校中學校に於て速記術を教はないか。敢て當局者の一考を煩はす次第である。

學校のボールドは一般にその面がバーチカルであるから左若しくは右から来る光線はその反対の側に反射してクラスの半面は常に明確に板面を望むことが出来ないのである。従つて眼を害すること夥しいのである。

今此れを防ぐにはボールドに近い所の窓に黒色のカーテンを備付けるか、若しくはボールドを今少しく傾斜させたらよからうと思ふ。

ストーブは何とかしてスチームに取かへることは出來ないであろうか、経費がゆるすならば此れ

は是非斷行して貰いたいものである近來學校でも電燈を多く用ゐることとなつたか此れ等はスチーム式にすれば副產物として供給することが出来る。其他物理化學の上にも少なからぬ利益があるであろう、併し實際経費が此れをゆるさぬとあれば致方はないが、然らばストーブの石炭配付法を今少し改めて頂きたい小使が毎時間石炭を持て來るのは第一授業時間の靜肅を破るのみならず時としては火種消にてなほ來ないことなごがあつて非常に不都合である、此れは各教室一日の燃料を定めて置て生徒か此れを司ること、したらいゝであろう。



文苑

散文詩(ツルゲニエフ)

紫影生譯

マアシヤ

久しき以前、彼得斯堡にありし頃、櫓を雇へは、いつも其御者と浮世話するを例とせしが、就中、このあたりの田舎より、貧しき百姓のねのがくひ料、さては地代の足前たしまへを稼がん爲に、丹塗の櫓と瘦馬とをゐて、都に來れる夜稼ぎの御者と語らふを好みたりき。

ひゞ日この類ひの御者を雇ひき……丈たかく岩疊に、眼青く頬赤くりまろしき男子おのこなりけり。廣き肩には襟襷の衣を引纏ひたれど、眞深くかぶれる破れ帽子の下より、美しき髪の毛、こまやかに渦巻きて見ゆ。

鬚なくうるはしき御者の顔は、悲しげに打萎れたり。

予は話しかけぬ。かれの聲は何となく悲しげなりき。

「兄弟、何とてうら淋しげに打沈みたる、うれはしき事のあるにや」と問ふ。

若者はしばしためらひたる後、終に「さなり、思煩ふ事のあるなり、これにしも勝るわびしさやあるべき、わが妻は失せにき」。

「汝はその女……汝の妻をいとしみしや。」

若者はこなたには向かで、只僅に打領きつ。

「私は妻をいとしみぬ、君よ、それより八ヶ月を経たり……されど忘れ得ず、今も絶えず胸をかきむしる悲しさ、何とて彼は死にけるぞ、若く強き者の、只一日のコレラにとりさらはれて」

「妻は汝にやさしかりしや。」

「ア、君」と哀れの者は太き溜息しつゝ、「われら二人の中の樂しかりしこよ、さるを彼は我をたきて去りぬ。村の人々が彼を埋めたりと、こゝにて聞くと齊しく、一散に村に急ぎ歸れり、そこにつきしは夜中過ぐる頃なりき。我家に入りて部屋の只中につつ立ち、静にマアシャー／＼とよべど、蟬の鳴く音より答ふるものなし。我は聲を放ちて泣倒れ、床の上に坐りて、拳をあげて地を打ち、むごき大地……わが妻を呑み失ひつ……いで我をも呑め……あゝマアシャと呼びたりき」。

彼は沈みたる調子にて、突然またマアシャと呼び、手綱をもぢながら、兩眼の涙を拭ひて袖打振ひ、肩をゆすりてまた一語を發せず。

櫂をいづるをり、定めの代の外に、銅貨なにがしを興へければ、兩手に帽子をつかみつゝ、添しく身を屈め、禮をなして、睦月の寒空、灰色の狹霧ふかく、人氣なき大路の上をゆるやかに櫂をたひさりぬ。

夕 榮 元 雲（オルガ）

(一)

漫淋しう重々しき薄墨の空は、彌生の半かけて吹き荒ぶ嵐の先觸れにや、絶間無う、鉛色の條文なせる雲片もて經緯れつ、眠れるが如くに靜りたる海の面は、死の如き冷寂にいや深う鑽され行きて、さよら波の影だに見ゆず、かくて、只長う磯に笪べりつくる潮の泡のみぞ白き。

遠き沖の喰は、やがて嵐の襲ひ來べきを告げぬ。

夜もすがらの旅の後、ピール、ミラルデーは、さよやかな帆船やとほんと心定めて、マルセユーの港に到りぬ。げに彼は、此港のいかなる水主にも勝れて、巧に船あやつる術を知り居たればなりけり。

されどそは甲斐なかりき。

今にも嵐とならず空のけはひの、夢にだにもよしなき發船なるを奈何にせむ。

「吾等は、陸を旅せざるのやむなきに至りぬ。そは道へいとや惡しければ、あはれ長くも懶き旅ならんかし」。

彼はイレンに語りぬ。

さは云へ、彼は旅の中にも、多くの言葉を彼女と交さざりき。彼の思ひは舉止によりてのみ傳へられたり。

かくて二人の旅人は、果しらぬ、裸体のまゝなる白堊の平原を、暫は横ぎりぬ。心細くも通へる路は、八千草に埋れて、深き轍のみを覺束なくも頼みなりし。

重々しき空は、早塙へ難うなりぬ。

折々閃く電の光は、遠き海の面を縫ひて、只暗く只凄く、かくて、嵐は迫り來れり。

行き／＼て、旅人のアワケスの城に到りし時、家夫と妻との驚喜は、實にいみじの極みなりけり。そは一度は、妻のまさなき心に、イレンを憎みもしたれ、今はなか／＼に眞心よりぞ彼女をやびゆたりしなる。されど旅人は、長くも此處に留らで、又もや牧師館へと下り行たり。

折しも降り初めし雨粒は小石の如く、さしも鳴りを静めし海の面は、荒れに荒れ狂ひに狂ひ、高まる濤は山とそりつ、疾風又疾風あはれしばしの絶間もあらざりき。

ピールは、身に纏ひし水主の衣に、イレンを犇と包みて、固き腕に脊負ひつ、狹き崖道かわだをひた走りに走りたり。

もの恐しき電光は閃を増しぬ、たゞろ／＼と猛り行く嵐は愈暮りぬ。かくて旅人の到りし牧師館の扉はござられてありぬ。

稍ありて、老いたる下婢は扉開きてイレンを見るよりも、亡靈とや思ひなしけん、忌はしげに、十字描きて祓ひつ、やがて扉はもとの如くに鎖されたり。

『サベリオはいづこに、疾く案内してよ』

尋ねる間さへ、ミラルデーは心も心ならざりき。

下婢は悲しげに頭を掉りぬ、かくて黙せるまゝに、とある室の戸をば披きたり。あはれ、其處にこそ、イレンは過ぎにし幾その年月を捧げて、畫かく術を學びたりしあれ。

如何ばかり樂しかりし過去の幻を描きては、イレンの心は糸と縫れつ、眺むるともなく眺めし

壁の上には、今も猶サベリオの下繪の數々掲げられてありぬ。

一側の壁を蔽ひ尽せし、大なる一枚の繪絹は、わけてもイレンの眼を引きぬ。そは今しも大劇場に入らんとする巫女の數多の下繪にてありぬ。されど、一際思を込めて描き出されたる巫女の一人の、あはれ思ひきや、彼女自の繪姿にてあらんとは。

さはれ、書きし人や今如何に。双の眼は閉ぢたるまゝにして、重き枕に頭をもたせつ、さながら木乃伊れ如き身は、はや死の神のつれなきみ手に打碎れたらんと思はれぬ。

牧師の捧ぐる祈禱の聲のみ一間に高う響きたり。

ミラルデーは枕邊近く寄りて、徐に握りしサベリオの手は、今や一の繪筆すら、取る事難きまでもか弱く細り居たり。

「君よ、君が逢はなんと願ひしイレンをこそ、我が、君の傍に伴ひ來りしなれ」。

叫きし聲は打顛へぬ。

かくと聞くより、忽淡き紅は、死に臨める若者の頬を彩りつ、再開きし眼の内、温き愛の表情のこれのみぞ永に消え失すべくもあらざりき。

「有難し、御身のこゝにとは思ひかけざりしに。」

血知期に近きものゝ聲は素枯れたり、

「いかでわれ、我身のつとめを御身に果さで、只此のまゝに逝き得べき。然なり、物として」

御身に負はざるはなきに、許し給へ、いとしの君よ、償ひ得べくば、御身に進らせんかの

忘れがたみをして償はせさせ給へ、あはれ、彼よりぞ他に…………」

云ひさして壁上の画を指しぬ。

泣かじとして彼女はすゝ泣きぬ。

「あはれ泣かせ給ふな、御身知りまさずや、やがて往ねべき我身の今よりぞ心安う彷徨ひ得

なむ、淨き天國に比べては、何として此世の樂しかるべき、さしも憧れし理想の影…………」

御身は、つれなくも、只一閃きと失せにしものを…………

此時狂へる嵐の中に、牧師館の扉をあはたゞしう叩く音聞えて、忽いたましき聲の隣室より起

りたるに、牧師は驚きて起ちて行きぬ。

戸口に近う一人の老いたる水主の、ふりしきる雨に濡れそぼちて、つば廣き船乗り帽の下より、

半面を現はせるが、いたくもはやりて、救船を請へるなりき、

そも、いつにてもあれ、船の危急を叫ばんの時、身を擣げて、救に馳せんとは、兼てより牧師

の願ひし所なりき、

救助の船は今將に、續を解かんとしぬ。

「さらば君よ、今しばし、またの逢瀬は、此世にてか、たゞしは天のあなたにてか…………」

牧師はたゞそこかなる聲にて、サベリオに告ぐるや、ミラルデーはイレンの手を取りて、熱き口づけをなしつ、さりとも、かたみに、後めたくや、幾度か顧みつゝ、やがて二人の姿は、嵐の中にかき消えぬ。

さらぬだに、さう／＼しき一間の後は、今やイレンとサベリオのみ

（一）

戀ならば遂げてやまんを

罪ならば悔いて晴れんを

形なき心の鳥の

空に飛ぶ羽はありながら

病み鹿の枷に泣くごと

そを思へば嗚呼此鳥の
羊角風なす狂はんばかり。（我が胸に）

さゝやかなる村寺の奥津城の下に、サベリオの眠は永はに醒めずなりぬ。

青白き燭の光は、打囲らせる壁の上に、巨大なる幻の影を投げつ、寂として廣やかなる一間を照せり、

さながら 尸を收めし、龕にも似たるいと大なる、サベリオの床近く、流石に、イレンは、去らんとして去る能はざりき。

彼女は、膽がなる燭の光を辿りて、壁上の二画をつくべと眺めぬ、

そは、彼女が、夫と巴里に赴かんとて、シント・ホルチュナートの港を出帆せし日より、掲げられたる、彼女自の描きし、サベリオの生けるまゝなる姿繪なりき、

此時彼女は、また他に、死の苦しみを看取れるなり。

そも救船に馳せしミラルデーは、破船の一切れに、したゞか頭うたれて、夥しき流血に知覺を失ひたりき。

五日の程彼は、生と死との間に横はりぬ。うつゝなの心は猶もさめざりしなり。

あはれにも果敢なく衰ゆし夫の身に對ひし時、さしもに燐ゆし活力と意氣とを思ひ浮べて、憐みしさに、新たなる愛は、イレンの心に泉と湧きぬ。

かくて、果なき心苦しさの幾日、限りなき惱の幾夜をば過しつ、涙と不眠とに、厚くもはれし

彼女の眼は、伏したる夫の面より、サベリオの儂忍ばず、かたみの繪には、絶ゆずも彷徨へり。夫の死は迫り来れり。

さても彼女の定めは、此世にて、かたみに想へる愛情のさちを、彼女に知らしめざりしか、こ

は、彼女が、後生の神秘を究めん爲め、いとも貴き忍びなりしか。一度は、彼女は思ひ斷ちぬ。戀は彼女の心深く眠りぬ。實に彼女は此世にて、唯一度の戀を賦されし女の一人なりき。

臘のごと柔かなる心の上に、唯一の戀ぞ、深くも刻れたる。あはれ此戀のみは、長へに圓かにして——よしや、月はかかる宵あるも、花は凋む日あるも——。

のび行く追想の糸を辿りて、イレンは深き念ひに沈みし時、彼女の心の裡に、いや深う刻れし、ミラルデーの佛を認めぬ。かくて彼女の胸の焰は燃ゆ立ちて、熱き情は野火に焼かるゝ枯草にも似たし時しもあれ、死は、愈彼の身をも掠め去らんと襲ひ來りぬ。

「思ふまじ、く、妻が身の行末、かゝる怖れに身をも亦、神や導き給ふとも、只運命の手のまゝ、に——」

かくて彼女は五指を組みかはしつ、まめやかに祈禱を捧げぬ。

心ともなく彼女は眼を閉ぢぬ。

されど、病める人の力なき呻吟は、彼女に、終焉のつとめを呼びさまさせつ、彼女はひたと彼に身をよせたり。見上ぐる眼、見下す眼、かくて、淋しき笑を浮べし彼の唇は、彼女に觸れて、力なげに、彼女の名をば呼ぶなりけり。

イレンは尋と彼に寄り添ひ、徐に、彼の色褪せたる唇を接吻しぬ。

「そは恕しにや」

これぞ彼の最後の叫び。

これぞ彼女の最後のいらへ。

百舌鳥の聲（銃獵瑣談）

鴨

水

左の一文は余が近頃同好の友人に送つた二三の手紙に聊か修正を加へたのである、冬の夜の御慰みにもさて。

○

曉の色は今や山の端から漏れて、彼方の團栗林を照さんとし、曉露快く地に敷ひて、金風颯々、天下はまさに夜の眠から醒めんとする頃、獨り愛銃を肩にして、山野を跋渉し、一發の砲聲に日頃の憂さを忘るゝことのいかに面白く壯快なるよ。

夜來の寒風は端なくも雪を呼びて、今朝夢醒むれば、あゝ快きかな四面たり白暎々として、六花の時に繽紛たるあり、憐むべき人の子は悉く蠍盧に蟄して、炬燧と首引させんとするに際し、日來の愛犬を友として、寒山に狐兎を追ふ、男兒會心の事、之を惜いてはた何をか求めんやである。團栗の葉のパラパラと落つる所、二三羽の山鳩、今や朝の餌を終へて、快く日の光を浴びて居る、あなや一發の爆聲天地の幽寂を破ると共に、羽毛雪と散つて、獲物は音するばかりに地に落ちたり、後には又前にもかはらぬ幽寂と、銃口より出づる烟硝の烟快く、彼方に一しきり鶴の聲を聞く。あゝ此の時、吾が胸中天地なく宇宙なく吾をも人をも悉く忘却し去つて、たゞ限りなき快感

に満さるゝばかりである。

僕は、さうだ、ちやうど十歳前後頃から、父が自分天狗の銃獵家(スボーリン)であつたものだから、日曜日毎には必ず父に伴はれて、早く銃獵の快味を覺え、九月も中旬となつて、桐の葉が一枚二枚バラリと庭の踏石の上に落つる頃ともなれば、日夜ひたすらに獵期の一日も早く來れかしと祈つて（御承知の如く獵期は十月十五日から始まるのである）、脾肉の嘆とはこんなに苦しいものかと思はなかつた事は無いのである。

だから、獵期に入つてからは、日曜日、大祭日は無論の事、土曜日の午後だとか、今日は數學の先生が御欠席で、午後の授業は休みだと來ると、サア來た、甘いぞと言ふ間もあらせらず、早速飛んで歸つて、例のウインチエスター廿八番鳥銃（だつたと思ふ）をひつさげ、近郊さしてぞ急ぎける、といふやうなわけであつた。

僕は御存じの通り、隨分道樂好きであつて、殊にからだか非常に虛弱であつたから、それは隨分いろんな運動をやつた、イヤやらせられた、ローンテニスやベースボール、擊劍柔道やボート水泳は言はずもあれ（イヨ、チャンピオンと冷かす勿れ、勝負に出て勝つた事は一度も無いのである）和船や魚釣までもやりました、が然しだ、僕のやつた運動法の中で、此の銃獵程(ハンドリング)面白く、爽快な、心地の好い遊戯は無い、と斷言してもいい、だらうと思ふ、運動法にもいろ／＼あつて、其の人の躰質によつては、之れはいゝが、之れは悪いとか、彼はやつていゝが、此れはやつてはいけないといふことがあるが、此の銃獵はそんな制限は決して無い、不具者で無い以上、どんな人でも

出来る、年の老幼と、性の男女とを問はない、怖らく一たび銃獵の快味を覺えた人は、決度生涯其の味を忘ることは出来まい、三日乞食した位の比では無い。

然らば、なせ銃獵かそんなに面白いかと問はれると、それはいくらでも答へることが出来る、まづ第一、空氣の新鮮な山野を跋涉するこいふ快味、次には爆聲、ゾドーン、ゴーといふ奴、此奴またステキに愉快なものだ、殊に山奥の、松の雪がとけて、其の雪がぼとぼと落ちる外には、何一つ音をたてるものが無い、所謂一鳥啼かずといふ幽寂の境に於て、一發發砲^{ハラフ}て見たまい、百日の溜飲一瞬に下り、殊に落第の鬱憤を漏すに特効あるは、鳴水の固く保證する所である、次ぎに愉快なるは獲物である、ハツと銃口から硝烟が迸しる、音がした、ウンと反動があつた、と思ふと同時、全く瞬時、獲物の羽毛雪を散つて見ん事落ちた其の心地！。

それからまた、人による事、其の日捕つた獲物を之れ見よがしにぶらさげて、わざとまわり道までして、繁華な町を通り、満都の士女をして、其の鼻の高さを計らせる先生もある。（鳴水は元來鼻も高くは無し、こんな馬鹿げた眞似はしなかつた）

銃獵の功能を言い出せば、到底盡ぐる事は無いが、僕思へらく、銃獵の功能の中最たるものは、不知不識の間に、其人を勞働させる事である、常ならばとても登れないやうな崖を犬につられて何の苦も無く上つたり、僅か一羽の山鳩を捕らんがために、數町の間を往復するのは決して珍らしくは無いのである、之れは確かに銃獵特有の長所であらう、勞働といつても決して過激に渡るといふことは夢にも無い、實に遊戯中の好遊戯、運動法の最上である、僕も此の銃獵のおかげで、

身躰のよくなつたことは、實に驚くばかりである、僕は生涯銃獵の徳を感謝するに共に、普く諸君に——殊にからだが弱くて困つて居らるゝやうな諸君には、是非其の實行を勧めたいのである。人によつては、非常に銃獵を攻撃する人がある、其の議論に曰くさ「銃獵なんかやる奴の氣が知れない、世の中に之れ程、殺風景なものは又と無い、美しい鳥や、可愛い獸が、樂しく遊んで居るのを、むざ／＼撃ち殺すといふ法があるものか、天地の美を害すること甚しいのみならず、第一人情を離れた野蠻の遺風だ」之れは詩人の寢言にあらずんば、馬鹿者の放言である、どんな間ぬけた銃獵家でもまさか鶯ばかりを狙つてあるく奴もあるまいし、それかといつて、血を見て喜ぶといふのが、銃獵家の主眼では無いのだ、此のやうな議論を吐くやつは、ライスカレーを喰つて見ないで、「オヤ汚い、猫のへど^{をつ}のやうだ」といふと變りは無い、それこそ其奴の氣が知れないといつたやうなわけで、僕は一時銃獵狂であつた、をやぢも隨分天狗であつたが、それは例の自分免許で、實際の技倆は、僕の方がズンと上だつた、然し僕のをやぢが銃獵をやり出したのが、殆んど銃獵家の始めたつたさうで、其の時分には、一寸近くの村まで出かけて、二時間位で山鳩の十羽位捕るに造作は無かつたさうだが、今はなか／＼をうして。僕は嘗て一羽の山鳩を討ち止めるのに五日間かゝつた事がある（驚く勿れ毎日かけたのである）、之れは決して僕がまづいからでは無い、鳥が余程減じた爲めである。

デ、隨分僕もこれまで、いろいろの経験をして居る、得意滿面の功名談や、今から思ひ出してもヒヤツとする危険な事や、さては馬鹿氣た失敗談も山ほどある、こゝには比叡山の頂上で象を射

止め、鞍馬の奥で天狗を生擒つたといふやうな、古臭い功名ばなしは除外にして、重に面黒い滑稽的方面のやつを二つ三つ書いて見やう。

何月何日といふことは記憶しては居ないが、たしか土曜日の午後であつた、例に依つて例の通り、西の方へ出かけた、が、どうしたものか、二三時間あさつたが、眼にとまるもの一つも居ない、むしやくしや腹でやつて來ると、はるかに山鳩の聲が聞える、占めた！と聲をたよりに近よると、残念、或る御寺の庭さきの梅の樹、距離もこゝから頃だといふ梅の樹の枝に山鳩か三羽、此奴二つと思つても何分寺の庭さきへ討ち込むわけにもゆかず、其の上梅の樹が低いもんだから、萬一向うの林に人でも居れば、怪我させるは必定、とはいへ、之を見すて、行くも腹の虫が承知せず、かもふものか、やつつけといふ例の特長を出して、狙ひをきめて、ズドーン……キヤッと女の聲、ハッと驚いた此の時の僕の胸の動悸、怖らく顔色無かつたらうと思ふ、今思つてもドキ／＼する、が幸ひ怪我も無かつてやれ／＼、キヤツといつたのは、丁度其の梅の樹から二軒と離れて居ない、座敷で、一人の權妻先生縫物をして居つた所、不意も不意、夜襲ならぬ眞晝中の砲撃を喰つたのであるから、たまつたもので無かつたらう、其の時の僕の驚き又たまつたものでは無かつたのである。又或る日曜の朝、中江といふ僕の友人を誘つて、東の方へ出かけた、此の日は鳩も討つた、鳩も捕つた、鳴も討止めた、所がをかしいのは中江君の初陣の美事さ、一体始めての人が、鳥に近づかうとする、其のスタイル程傍から見て滑稽極つたものは無い、まづ抜き足、差し足、盲者が闇夜に水たまりでも歩くといふ風体、成るべく鳥に見つからないやう、鳥を驚かさないやうにと

の深い考からではあらうが、これが反つて拙いので、鳥の奴、不思議な顔をしてしきりに眺め始める、それをも知らず、中江先生後生大事と近づく、銃をかまへる、狙をきめる、今や引き金を引かうとする時、馬鹿めと言はねばかりに鳥のやつ、チュン／＼チユチュン……雲霞とぞ逃げのびける、

又或る年の冬、僕は父の友人が、日頃命の次ぎに秘藏して居つた、ポインター種とか何とかいふ雉獵専門の犬を貸つて、大原から八瀬の方へかけて、一つ雉、山鳥の五六十も捕つてやらうといふ勢で出かけたことがある、はや雪はちら／＼と降るといふ時分であつた。山に入るとだん／＼犬の鼻息が荒くなつて来る、占めたと、銃を青眼（？）にかまへて、寸分の抜目を見せず、近からん者は鴨水の顔に表はれたる得意の色にも見、遠からん者はヅドンと討ち出す銃聲にも聞け、吾こそは……と名乗りを揚げんばかりの意氣込、といふのも之れまで親父などの御供をして雉獵に出かけたことはたび／＼あつたが、自分獨立の雉獵は、鴨水脣の緒切つて今日がはじめ、昔の人は之を初陣と申す。

さて其の意氣込は好かつたが、犬の鼻息いよ／＼荒く、一まき／＼獲物に近いて、今か／＼と思ふ時、出た！僕の右の肩を掠めて小牛程の猪では無くて、色も形も見まがふかたなき見事な雄雉一羽、來たな！と嬉しさに躍る胸を鎮めて、雉が、僕の立つて居る山を越して、速力のゆるんだ時、發射！落ちた、見ん事。

だが、不思議なのは發射たのと同時にジョンのなき聲、不審晴れずと、ジョンが獲物を嘲へて常

のやうに千切るよばかり尾を振つて、僕の足もどへまつはるのを、よく見てやれば、オヤ!! 尻の邊に、二号霰彈の打ち込んだ痕が一つ二つ三つまで、あはれや血さへざろくと出てをるでは無いか、弱つたの何のと言ふだけ野暮だ、僕は實以て「あーア」と思つた。

因に云ふ、日本には銃獵に關する雑誌は至つて尠いが、東京から出る「獵友」は、實に面白く有益だ、讀んで見たまへ。

魚釣道樂に就いては此次ぎにでも書いて見やう。(三十七年十一月)

落花餘芬引

村上函峯

明治二十七年征清之役。陸軍歩兵上等兵杉盛隆太郎。戰死于瀨洲牛莊城。大隊長陸軍歩兵少佐内藤新一郎。授功狀云。我師團十二月十一日。戰於二道河子。轉進海城。越三月四日。攻牛莊城。我中隊守軍旗。敵兵數百據街衢死戰。彈丸亂發。隆太挺進馳突。中丸而斃。敵遂敗走。我軍取牛莊。是雖中隊諸士之力。亦隆太致死之功也。隆太從海城向牛莊。先裝文書送故鄉。蓋決死也。嗚呼其人雖死。其名則存。頃者其友八木又次郎。澤田幸吉等相謀廣求詩歌。以吊乃拜其嘗寄父母手簡數通爲卷。名曰落花餘芬。刊以頌同人。徵余言。余不識其人。聞其爲人溫厚。事父母。善盡其歡語曰。求忠臣必於孝子之門。果信矣。明治三十年四月上浣。函峰村上珍休題。

題平相國書金泥阿彌陀經後

同

平相國位極人臣。身爲外祖。而天下政事。皆出其意。顧橫暴驕溢。古今少比。此卷相國手寫。筆法沈著。在諸歐間。蓋相國晚年好佛。或出懺悔之餘者歟。町田君好佛珍襲之。公退之暇。靜坐展之。自有對相國成佛像想。亦是尚友一端。丁巳二月佛滅日。函峰仙史識。

秋聲賦

紫影舊稿

月を追ひつゝ鳴きたつる

家をめぐりて鳴く蟲の

黄金の響、玉の聲、

聲すみわたるわが宿に、

姫娥も耳を傾けて、

いとゞ月さへさしそへて

雲も動かずいざよひぬ。

影はづかしき身の秋を、

蟲の心のやさしきに、

いかになれどや鈴蟲の音もさやかにふりいでぬ。

月の光のさやけきに、

過ぎ來し方の懶ばれて、

胸の思のかにかくと、

みだれ苦しき今宵かな。

葦の底にうづもれて

露に宿れる久方の

読みつる書の幾千巻、
作れる歌のいくそばく、
眞如の影や宿りたる。
さやけき音にや響きたる。

浮世のさがのさがなくて、
流るゝ月日水莖の

岡邊の笛の一ふしも

残すふしく、いたづらに

生くるといふも名のみなる。

『さるにてもあまりに鳴きそ、鈴蟲よ、
聲あるものは命なし、
涼しき聲と汝がいのち
のぼりて消ゆん、中空に。
友なきわれを憐みて
聲を惜みてながらへね。』

葎のうちに聲はして、
『否ざよ君よ、なかんとてしも生くる身を、
生きずとてしも鳴かざらん。
あるじの君よ、君はそも
いかなる音をや歌ひいで、
長き命を終へんとはする』

木犀いけて

桔

桑

友にわし黄金木犀

綠こき厚葉つややか、
ちさき花金顆をつらね
ひなびたる様ぞいたいけ、
つれなくも折りけるかなと
さいなまじ友がふるまひ、
我がためにもて來しものを

あるまでの命にいけん、

離僧

條原水衣

水牛の太角剝りし

花いけに水さしいれて、
すうびたる床の柱に

懸活けの手風もすゞし、

凋落の風ふきすさび

さびしさの占むる秋には
汝が香ぞあまりに高き、

佗びすみの軒にあふるゝ、

小夜時雨旅の戸たゞき
友ほしきこの夕ごろを
汝が下に片袖しきて
いひしらぬ香にふしぬ、

鶉なく萩の里

狐すむ 瘟寺に

こよひしも 夢にみん
師の君の やせし頬。

屋根もるゝ 月かげに

きらめくや 十文字

さゝがにの 糸ゆれて、
獅坐のかげ 蟲かなし。

たばろげの 父のいへ

歌ありき 春の宴、

母うへと よびさして

ちさき胸 くづをれぬ。

はゝうへは 星のくに、

わすれては すやくと

姉ぎみの 膝にふし

うたうねに わんすがた。

さびたまふ 姉ぎみの

琴きて ゆめうつゝ、

扇戸に よりたりし

あゝひと世、みなきぬ。」

高殿に 繪師わかう、
ほゝゑみて 紅ときて
花菜摘む わが園に
袖かゝげ いくしづく。

音もなく 流れゆく
眞清水へ、つと落ちて

亂れたり 花模様。

をきなうて けうと見し。

せまりくる 夕靄を、

いづこより ひら／＼と

翅きれし 白き蝶、

見あぐれば 繪師わかう。

四

香ありかに 錦織る

眞清水の 紅れひて

三

蝶ちさう、さて遠し、

姉ぎみの 詩の御題。

あなさびの たなじ身と、

岸づかさ こひくれば

蝶きて、わがやしき

野のはてに、日はくれぬ。

すでに見る、ひんがしに

紫薇の宮 母の國、

またくは んみたまふ

あゝそれか、こよひまた。

五 鐘ひゞく 峰のうへ、

谷こえて 鐘ひゞく、

憂しこの世、憂しこの身、

鐘ひゞく、野のあなたた。

いくたびか 眉白き

六 師の君の 膝ちかう

墨染の わが袖に

さとられぬ よべの執。

よひくに 樓により

木の葉もる うすあかり

それとみて、つくや鐘、

母こひし 星よふれ。

吹きたるは 峰の風、
みだれゆく 我が禪機。

あさ／＼に 閼伽くみて

うすれゆく 星かぞへ

さびしみに なれし身は

そのままに 師の禪坐』

八

都より、いざさらば
なつかしき ふる郷は

日は落つる 西の方、

ひんがしは 我が菩提。

かくて經ぬ 三とせごし、

月落ちし 夏の小夜、

川にそひ たゞすめば

螢とぶ 西の空。

山にいね、原にふし、
かくて行く 道いく里、

雨しろう 我笠に

つひにきぬ 秋の末。

夜ぞせまる 荒寺に

夢に入る ちさき僧、

ほゝゑむは 曇什麼生。』

○
蘆 笛

牛

斗

紅に染みし血潮の劍横さまに振れば秋風迷ふシベリアの原、
思ひ出せばさても十年よあゝ秋よくりし手綱に轡た走る、
暮れて行く秋の行衛や夕榮の雲散りゆきて流聲なき、
金瓶に瑠璃の酒くみし奢り子のかざしに凋む橄欖の花、

我知らず人また知らず詩に瘦せし魂の泣くらんアレナレの秋、
宴果てゝ燭炬仄暗し高殿の朱欄に白う木犀の花、
歌がきて水仙折りて床の上誰に送らん此花此歌、
時雨ふりて川風寒き黄昏を二上り唄ふ離れの亭、

日は入りて野分に亂る枯尾花箱根路八里追分のうた、

うらぶれて巷にしてし破れ扇眼につらし此世の雲、

補陀落の聲絶え／＼に霧ふりて姿いぢらし巡禮二九、

秋風のはづれ毛そよと面にあてゝ時雨れて行くよ駒形の空、

繪筆投げて旅に愁ひて行く君よあゝ唯紅き「醒めぬ夜の夢」、
壯なりや吁大なりや美はしやバビロン城の電のたはむれ、
そぞろ我が魂の碎けぬ秋の夕、かくても笑める星影二ツ、
起ちて舞ひてかざしの紅葉君が奏づ瑠璃の緒琴の上に亂れぬ、
行きて君花に醉へりしライン川思へば戀よ我夢淡き、

菩提樹の綠の影に今ぞ泣かん君がみ袖に我歌秘めは、

夜を晝になしたまはれと祈る子を何と見給ふ南無阿彌陀佛、

再は逢はん逢はじと三年の今日眞萩かつ散る風の淋しさ、

果敢なしこや岸に彳む水鏡風の碎きし身のきれぐを、

その涙その一聲を春と見てなご秋に惱む翅と知らぬ、

鞭あげて心の駒に虹のわ渡れば天宮を隔つるアルプスの峰

樂の音に光に花の彩に香に弦斷れても五十の律、

さはれ見よ幸あるものも幸なきも野末の草に光なき星、

長江に己が名留めし詩人の行ゑや迷ふ水のせらぎ、

○

夢多き身の安からぬ秋の夜やこゝ京を北二百里の我
若うして胸に幾重と結ばるゝ帶もぞ彩を千草好める

ま、

か、

小屏風に細りし影の覺束な金泥ねぞや秋さびれゆく
秋寂し夜蜘蛛の絲にくられて我影壁に日々細りゆく
胸は重し入憚りて枕あげて又撫で見る頬のやつれよ
細戸洩る風に寝返へりの現なき病む我髪の長き夜心
腹這ひて我どし薬煎慣れては過ぎなむ秋の夜長をかしき
薬煎る火桶の側に小走りの妹を袖に弟添ひたる
椽端に火桶運ひて薬煎つゝ鞠まさぐるよ妹の秋

枕邊の窓に夕日はたひて庭もせ黄ばむ樹立雅趣あり
うたて秋秋を小草のうす色に病みて見る人あゝ我のみか
あはれ知る君の小雨に濡れて來し萩の夕の歌清かりき
さだめとや熱き血汐に染みながら天にもぞかむ心の弱き
と言ひて面そむけし我やあらぬ萩の下露そとふれて見き
さりごもの瘦男が露の清ければ瘦せやせ咲ける萩の一本
月の夜毎誰にきけとや村下の水車へ若き舍守唄ひ來

浪枕夢よりもの寒しろに海人の伏屋は薺藻焚くなり

樹蔭洩る月の光を袖にこめて廻りめぐればさとも秋なり
思ひそぞろそと追ひ見れば誰が子二人秋の夜姿いと寒げなり

涙なり才に負ふ名の筆に病みてまた此秋を瘦せて過ごんとす
さればとて拔れ毛からまる櫛の歯の缺けしを棄てぬあゝ若き憂
幾度か書き列ねては墨引きし病の日記の亂れ我調
遂に我病の日記に墨引きし小さき心の淋しきなやみ

○

大原女の姿やさしき色たすき夏菊のせて加茂の朝ゆく
青葉ひたす森の樹かけのこもり沼、藻の花白う波のこまかき

星に誦す哀詩の吟の音に通ふ葉摺やさしき森の調べよ

山鶴籠は並木の杉に見えずなりて驛路寒ふ雲の下り來ぬ

水細ふ蛇籠破れたる川添や野菊みたれて秋の雨ふる

影もなき遠野に胡笳の音やいつこ月高梁に秋風さむき

想多き都の秋にたへやらで小雨ふる夜を歌にまかしぬ

○

詩はひとりうれひの手綱きみのせて若き駒やる野のたもひかは
こととはもうかれにあらず都鳥みしことなしと浦の小簾より

被衣してきゝし秋の夜長暇笛による子を月のくまなき

蝶をたつねあぐみ侍ると桃われの十五が袖にかくれ嵯峨野路

水

木

栗本瀨平

生

水

木

鳥　　せ　　し

K

N

生

やゝありて鷗きえたる波月夜君ゆきし日こそかくはありしか
鳥　　せ　　し

鳥さしのあとついてゆく花野かな渡船の釣錢^つを顧みもせず
けたゞまじう鷗の笛吹く藪の陰見上ぐる枝の銀杏散りけり

手の中には鳥は南無三逃げのびて桔梗落しに暮るゝ夕靄」

雜　　吟

外

圃

K

N

生

翻譯の机に薔薇の匂ひけり

竹婦人頭も尻もなかりけり

抱籠に月すき通る柱か

か

墓の眼の灯にひかる野風呂哉

紫陽花や日除の下の金魚鉢

神鏡に松の落葉の映りけり

蟬啼いて住吉四社の茂り哉

單物浪速の夕を吹かれけり

人形に夏の虫とぶ灯かな(造り物)

賑ひや涼み芝居の門灯

尻を放つてひとりをかし夜長哉

化けかねて穴に狸の晝寝哉(旅順艦隊)

人形に夏の虫とぶ灯かな(造り物)

蝙蝠や鞠祭の濱かゞり

きら／＼と十三洲の旱くも

虫干や衣書一笈の老書生
墓の出る點火頭や露の雨

月遅く竹の皮ちる庵かな
竹の皮散るや伏見の世捨人

桺側やランプの笠に秋の風(下宿)

漢學を教ふる寺の芭蕉かな
式場に大菊活けし三日哉

肌寒の垢も久しき衣かな(征衣)
雨多き加賀の相撲の日數かな

夕月に鯉釣り惜しむ汀かな
老いて住む家豊かなる芭蕉哉

路の秋螽に交る蛙かな
暗室を開けば秋の日和哉(光學實驗)

山晴や御陵道のはな芒
○

萍

K. N. 生

露の木槿糸瓜の戀や庭の秋
野分して我か山莊の恐ろしき

雲

岸に立てば歎乃止みぬ芦の花
野鼠のつと走り行く芒哉

○

萍

○

螢放つ長者か庭や水行燈。

初蟬や院に在五の君御座す。

鉛を打てば岩に音あり清水かな

雨にぬるゝ松葉牡丹や屏の裾。

伊達湯かた訛のぬけぬ女かな。

蝙蝠や大木戸鑽す寺男。

雲の峰船の尻やく干渴かな。

撫牛の鼻かけたるに蜻蛉かな。

初萩や髪をねらせし三の皇子。

朝寒や裸一貫貧の脛。

○

紫

影

四高俳句會詠草

(甲辰秋の卷)

菊川に歌召す主や虫の聲、
秋の虫草も入れたる袋かな、

傘さして演習見るや稻の雨、
撰り屑の虫鳴く麻の袋かな、

稻を刈る屯田兵の晝餐哉、
破寺や佛の御坐に虫が鳴く、

野良狐逃げ込む稻の茂み哉、
背戸の月蛇籠に虫の聲すなり、

稻船や上荷にしたる鳥威し、
松虫の宿と申して小雨哉、

居酒屋のくらき障子や稻の雨、
湖暮れて森かげの稻戦ぐなり、

虫籠や市に古りたる生藥屋、
虫聽いて楊枝削るや老の喉、

掛稻や鶏うづくまる春戸の雨、
掛稻や鶏うづくまる春戸の雨、

生姜賣醋賣もついで來りけり

南軒に兒孫を愛し菊の花

菊日和目白に水をあびさする

屋移のしまひ車や菊三鉢

藤豆は垣にすがれて菊の花

袴はいて吹革を祭る小鍛冶哉
爐開や低うつりたる自在鍵

舟にして竹筈引上ぐる出汐かな

根來椀臘八粥の熱き吹く
熊炙ぶる梁山泊の軍師哉

○

湖

月

夕霧や麓の家のちよろ／＼火
燈遠き寂光院や秋の暮

道問へば疋子なりけり秋の暮

秋寒く小さき星の光りけり

岸に立てば歎乃止みぬ芦の花

野鼠のつと走り行く芒哉

○

萍

水

流し行く板新道や秋の聲
露の木槿糸瓜の戀や庭の秋

野分して我か山莊の恐ろしき

○

萍

雲

岸に立てば歎乃止みぬ芦の花
野鼠のつと走り行く芒哉

○

萍

水

流し行く板新道や秋の聲
露の木槿糸瓜の戀や庭の秋

野分して我か山莊の恐ろしき

○

萍

雲

菊川に歌召す主や虫の聲、
秋の虫草も入れたる袋かな、

傘さして演習見るや稻の雨、
撰り屑の虫鳴く麻の袋かな、

稻を刈る屯田兵の晝餐哉、
破寺や佛の御坐に虫が鳴く、

野良狐逃げ込む稻の茂み哉、
背戸の月蛇籠に虫の聲すなり、

稻船や上荷にしたる鳥威し、
松虫の宿と申して小雨哉、

居酒屋のくらき障子や稻の雨、
湖暮れて森かげの稻戦ぐなり、

虫籠や市に古りたる生藥屋、
虫聽いて楊枝削るや老の喉、

掛稻や鶏うづくまる春戸の雨、
掛稻や鶏うづくまる春戸の雨、

生姜賣醋賣もついで來りけり

南軒に兒孫を愛し菊の花

菊日和目白に水をあびさする

屋移のしまひ車や菊三鉢

藤豆は垣にすがれて菊の花

稻の村雨に粉殻煙るかな、

紫雲

よく饒舌る人にはねたる粉炭哉

同

(畢)

鶴聲庵小集

炭の香や甘泉殿の夜の雨

紫嶺

涼車下りる傷病兵や秋の雨

同

歌論義や木の丸殿の秋の雨

同

炭賣や雨の吉田の日暮頃

同

寒渓の石皆奇なる紅葉哉

同

棉取や河内大和の日和雲

同

片手間に柴漬するや老の杣

同

隣から炭かりにくる長屋かな

同

犬が啼くやみの村や秋の雨

同

鉄氣ふく山の古井や草紅葉

同

干棉や屋根下鶏なく秣小屋

同

國寶の掛物くらし秋の雨

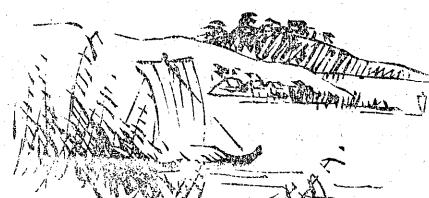
同

水盤に紅葉浮きけり青龍寺

同

柴漬の鯰たやすく取られけり

同



卒業證書授與式

化を輸入し文に武に駿々乎として長足の進歩

を爲し今日に至りて終に先進なる歐米文明諸

國の伍班に列するを得たり、而して其本源を

推究するに偏に我が先輩諸士の勇往邁進以て

國家社會の爲め盡瘁せられたる効果に外なら

ず然れども熟々當今の時勢を察するに百般の

事業未だ全く成らす國家の前途尙ほ遼遠に屬

す、我輩後進たる者は當さに奮つて先輩の志

を繼紹し益我國家社會の福利を増進す可き責

任を有す而して將來主として之を負擔す可き

者は即ち諸子なり其責や大にして其任や重し

と云ふ可し。

今や我國は露國と開戦し連戦連勝日に効果を

收めつゝあれば終局の大勝利を得ること殆ん

ど疑なきに似たり、而して試に戰勝の後我國

民の責任如何を慮れば洵に廣大無邊にして幾

抑々我國開國以來五十年上下一般に歐米の文

諸子は此千載一遇の盛時に生る實に多望多幸の人と謂ふ可し諸子是れより進んで大學に入らば常に本日受け得たる所の資格を重んじ夙夜先輩の勞苦を思ひ又之を時勢に鑑み刻苦勉勵して各、其の志す所の學術技藝を研鑽し以て國家の須要に應じ益々社會の文明を發展せんことを期せざる可からず是れ諸子が國家の厚恩に報ふる所以なり。

又爰に特に一言す可き事あり現に戰ひつゝある所の日露戰爭を觀る可し開戰以來海に陸に戦へば必ず勝ち攻むれば必ず取り以て日に敵軍を壓倒し我國威を四海に發揚しつゝあるものは何ぞや蓋し籌策の周密將士の忠烈兵器の精銳紀律の嚴肅行動の敏捷等一として之が因たらざるはなしと雖も抑々亦忠君愛國の精神と百折不撓の志氣との一貫するものあるに非ざれば焉んぞ能く斯の如くなるを得んや凡そ

天下の事知識と熟練を要するは固より言を俟たず然れども苟も一貫の精神と志氣とを缺く時は決して其効を奏すること能はざるなりされば諸子に於ては宜しく常に將士か戰陣に臨む所の精神と志氣とを以て學業に從事す可し果して能く斯の如くならん乎、學として成らざるはなく業として遂げざるはなかるべし諸子旃を勉めよ。

明治三十七年七月七日

第四高等學校長 吉村寅太郎
即・卒業生總代出で、謝辭を述ぶ、曰く。

明治三十七年七月七日本校茲に生等か爲めに卒業證書授與の典を擧げられ貴賓の臨席を辱うす生等の光榮何者か之に過ぎん抑も本日の榮ある所以固より孜々精勤の効果に依る可しと雖も而かも本校の教養懇篤ならずんば焉んぞよく茲に至るを得ん、感激謝する辭を知ら

す今又校長閣下授くるに深厚なる訓誨を以てし將來の覺悟を指導せらる生等驚なりと雖深謝肝銘能く其意を体し益々智德を研磨し品性を修養し以て國家有用の材たらんことを期す謹て答ふ

明治卅七年七月七日

第十六回卒業生總代 農科 齋藤拔
かくて式は終りぬ。
あゝ螢雪此に三年、洋々たる前途の希望を望みつゝ、卒業生諸子は各證書を手にして歸省の途に付さぬ。

第一部

英法科

澤永太吉（富山平）
河合博之（神奈川士）
園田三朗（東京平）

多田平五郎 (石川平)

太田榮次郎 (廣嶋平)

生井洸 (板木士)

吉野恒 (石川平)

森彥兵衛 (岐阜平)

增田俊一 (千葉平)

久田元稱 (石川士)

島田朋三郎 (德嶋平)

下野遠善 (茨城士)

友眞碩太郎 (石川平)

小原時雄 (石川士)

辻米次郎 (石川士)

森田桂三 (奈良平)

田口邦重 (板木平)

川村惇次 (靜岡平)

根津政吉 (奈良士)

後藤幸太郎 (石川平)

横尾則孝 (東京平)

森田秀治郎 (奈良平)

近藤達兒 (福嶋士)

永宮二男造 (福井平)

芝沼榮作 (千葉士)

千秋寛 (福井平)

川名安治郎 (千葉平)

安藤徳男 (岐阜士)

加藤靜吉 (廣嶋平)

高野綱雄 (新潟平)

藤澤廉之助 (富山士)

文科(獨文科を除く)

古道秀 (石川平)

淺野利三郎 (岐阜平)

野村宗朔 (石川平)

齋藤重保 (富山平)

高橋俊英 (新潟平)

吉川俊男 (滋賀平)

本莊了 (新潟平)

長沼賢海 (新潟平)

小山龍之輔 (島根平)

長谷川賢一郎 (京都平)

工科

渡邊轍 (新潟平)

鶴田多八 (愛知平)

山口天祐 (長野平)

井上専敬 (新潟平)

増山宗誠 (富山平)

橋超妙 (島根平)

吉川祐戒 (愛知士)

富岡教雲 (新潟平)

伊谷春平 (靜岡平)

高橋謙 (新潟平)

京谷正治 (富山平)

周周 (靜岡士)

加藤博 (石川士)

橋本四郎 (靜岡平)

獨文科

谷了性 (石川平)

佐藤鉄巖 (愛知平)

大矢梅太郎 (愛知平)

小西直忠 (石川平)

五十嵐博厚 (新潟平)

上野意純 (石川平)

佐藤鉄巖 (機械)

大矢梅太郎 (採礦)

小西直忠 (土木)

五十嵐博厚 (機械)

上野意純 (電氣)

(應用)	佐藤代吉	(岐阜平)	(製)	河瀨庄之助	(岐阜平)
(機械)	坪田脩吉	(福井士)	(土木)	笠原由太夫	(福井平)
(造船)	寺西武雄	(石川士)	(造船)	崎田喜太郎	(石川平)
(機械)	秩父順次郎	(石川士)	(土木)	前田廣治	(石川士)
(土木)	吉見増次郎	(東京士)	(土木)	坂田喜太郎	(富山平)
(土木)	平井	(東京平)	(土木)	竹尾秋助	(愛知平)
(土木)	木村自老	(福岡士)	(機械)	田邊邦平	(新潟平)
(土木)	井上相如	(岐阜士)	(土木)	堺尾喜藏	(京都平)
(土木)	春日信市	(岐阜平)	(土木)	森川十喜治	(岐阜平)
(土木)	堀田將之	(石川士)	(機械)	牛島蒸	(福井平)
(土木)	鈴木豁二	(静岡平)	(機械)	板垣贊造	(巖手士)
(應用)	依田愿	(福井士)	(應用)	平尾喜藏	(京都平)
(應用)	野村敬	(愛知平)	(機械)	赤塚音太郎	(奈良平)
(機械)	秋田榮次郎	(大坂平)	(應用)	服部武彥	(愛知士)
(造船)	中島喜代治	(新潟平)	(機械)	田原秀太郎	(滋賀士)
(土木)	鈴木	(石川士)	(造船)	市川茂三郎	(石川士)
(農化)	依田	(長崎士)	(土木)	高木忠次郎	(島根士)
(林)	遠藤貞德	(東京平)	(林)	鎌木徳二	(石川平)
(物理)	伊東直	(福井士)	(農)	渡邊清	(福井平)
(植物)	神保金衛	(群馬平)	(農化)	服田美濃吉	(岐阜士)
(物理)	池田市尉	(長野平)	(林)	大久保直信	(石川士)
(植物)	中山又八	(神奈川平)	(農)	盛賢藏	(石川平)
(物理)	宮所富太郎	(和歌山士)	(農化)	關野鑑三	(新潟士)
(化學)	五十嵐庸造	(千葉平)	(醫科)	渡邊清	(福井平)
(農化)	矢口清	(栃木平)	(林)	松橋紋三	(長野士)
(農科)	(採礦)		(農化)	鈴木熊太郎	(静岡平)
(農科)	(採礦)		(醫科)	有馬英二	(福井士)
(農科)	(採礦)		(醫科)	山田鼎	(福井士)
(農科)	(農化)		(醫科)	及能謙一	(名古屋平)
(農科)	(林)		(醫科)	小南又一郎	(岐阜平)
(農科)	齊藤繁		(醫科)	森本正志	(高知士)
(農科)	河原拔		(醫科)	桑原政策	(高知士)
(農科)	澤渦滿		(醫科)	小南又一郎	(新潟平)
(農科)	(石川平)		(醫科)	森本正志	(高知士)

中西培一郎 (愛知平)

松井 實 (福井平)

塙野豊次郎 (新潟平)

金尾惟敏 (廣島平)

平林俊吾 (長野平)

松浦門助 (新潟平)

酒井修白 (富山平)

古川新治 (新潟平)

北川太三郎 (石川平)

貴志廣徳 (和歌山平)

増田雷助 (福井平)

星政一 (新潟平)

内田謙一郎 (岐阜平)

梅田馨 (埼玉平)

菊池正三 (巣手平)

藤田孝四郎 (滋賀平)

伏屋頼造 (岐阜平)

宮下辰巳 (静岡平)

三野安三郎 (石川平)

菱川恒生 (福井平)

芹澤理作 (静岡平)

山本龍藏 (兵庫平)

鈴木龍藏 (兵庫平)

宮下辰巳 (静岡平)

小林修藏 (石川平)

石川直樹 (秋田士)

卒業生諸子を送る

諸子が本校に來りしは秋風北陸の野を襲ひ蓼花白露の幽なる枯荷落桐の慘たる客思轉た凄然た

るものあるの時なりき。かくして歲萃過ぐる事此に三年、今や新綠麥秋の候に際し遠く業成りて金城の下を去られんとす。

あゝ余等が此校に來り諸子と手を把りて談笑し

諸子に導かれ大に鑑省する所ありしは實に僅々

數旬の過去と覺ゆるに諸子ははやも遠くいや深

き學海を望んで去らる。余等や諸子と別を惜む

の情の憐念たるものあると共に、前途に遠大な

る志望を懷いて最高なる學府に幽奥なる學理を

研鑽せられんとする諸子の境遇を見羨慕の情禁

する能はざるものあり。

あゝさらば諸子行け、唯帝國の將來の爲めとの

より發揚され、此腐敗したる人物欠乏の時代

に於て遺憾なく其義務をつくし、其本領を現は

されん事、余等實に切望に耐えざるなり。

佐野先生を送る

十一月六日、秋雨蕭々として降る。此日我が愛

親なる佐野先生遠く九州に榮轉されて金城を去

られんとし、余等之を停車場に送る。漠々たる

煙迷ひて一脉の淒愁我が胸中に湧いて制する能

はざるものありき。

あゝ先生十余年の精勤や、既に先學年の祝賀會

及び本回の送別會上に於て云ひ盡されしと雖、

先生の功蹟先生の恩德や、永く本校及び時習寮に

残りて消滅せざる可し。

此度の榮轉や實に先生永年の勞苦に報ゆるもの、加ふに先生の赴任地は實に先生の郷國にあらずや、功成り名遂げ故山に歸臥するの慨ならんや。

願くば、先生、健在にして其職務につくされん事を、願くば先生の厚徳を懷ひ、先生の温情を慕ふ者猶金城の下に残りて學業を勵みつゝあるを忘れ給はず、芳草淡煙催せるの時、菊花桐葉美なるの時、河北瀉の秋、卯辰山の春を想起し、永く此先生が第二の古郷に變らざるの温情を寄せ給はん事を。

涼車は發し、ぬ黒煙長く残りて余等は悄然として立たりき。雨猶止まず顧れば醫王山の山頂僅に紺碧を現はし、此十年の友を送るが如し、さらば先生、旅路つゝがなく行き給へ（啞子）

今や殘暑去り、秋風金城の古松を鳴らし、過雁雲影皆蕭條たる秋の姿を帶びざるなし。此時に當り我北辰校新に三百の俊才を迎ふ、試に諸子を見れば皆遠大の希望、最高の理想を抱いて金城城下に集りしもの、欣然たる意氣自ら胸中に湧いて勇氣制す可からざるもの在るを見る、余等の喜悅何物かよく之に若かんや。

思ふに諸子遠く郷國を辭して來るや、高らかに「出郷關」を吟じ、前途に横はる難關は悉く之を踏破するの概あり、血液湧ける其眼は唯光榮ある月桂冠のみ注がれしなる可し。

あゝ然れども諸子や既に滔々たる俗世の濁浪の中に漂ひ初めぬ。諸子の懷ける理想は實現するに難く、然かもなつかしき古郷を去ること百里北陸の僻地に在り、加ふるに金城の地由來天候險

新入諸子を迎ふ。

北辰會役員氏名

本學年度北辰會役員は左の如く任命されたり。

の險惡は此地をして淫猥ならしめぬ、爲めに此地に在る青年多く墮落しつゝ遊蕩壞倫亦昔年的好青年に似ざるものあり。

本校の校規や嚴にして、肅なりと雖往々腐敗の分子を出すの止むを得ざる現象を見る、殊に現今の上級生の墮落や實に豫想の上に置づ。

あゝかかる腐敗は何故ぞや蓋し彼等が始めて金城城下に來りし當年の決心意氣を忘却せるに依る。

願くば諸子、卿等が現今懷ける意氣を永く消沈せしむるなく、天候の險惡に敗をとる事なく、又たは此時流に淆亂せらるゝなく、勇進して唯一の希望理想に達せよ。

聊か感を述べて新人諸子を迎ふ。（啞子）

演説討論部

講話部	同	同	同	同	同	同	同	同	同
河合義文	赤尾直松	山岸勘太郎	島俊吉	鏡行茂	藤好三	吉村省井	吉村寅太郎	副會長	會長

一部一甲 河合良成
一部一乙 中山隆吉
一部一丙 三邊長治

二部一甲 密田良太郎
二部一乙 多田精策
三部一 松川十一郎

二部一乙 中島一郎(以上漢文)

文三 石坂大巖(以上漢文)

文三 得能佳吉

文三 增田惟茂

文三 川村幸一

二ノ二 吉田一郎

二ノ二 脇田武夫(以上獨文)

英法三 岡田信

英法三 田口八郎

文三 竹島寛

一ハ二 吉田良次

二ノ二 衣斐清香(以上英文)

山崎麗

二ノ二 一色誠次郎

雑誌部委員

文三

山崎麗

西本道圓

演説討論部委員英法三、栗林豊作

二ノ二 關谷吾一

二ノ二 泉崎三郎

二ノ二 山本月照

二ノ二 井坂勝三

二ノ二 岩田幸美

二ノ二 篠原一慶

二ノ二 渡邊信吉

二ノ二 上杉復男

二ノ二 内田樸

二ノ二 衣斐清香

二ノ二 石黒文吉

二ノ二 高木靖彥

二ノ二 根津金吾

二ノ二 關谷吾一

柔道部委員
ベースボール部委員獨法三吉

二ノ二 小泉禎次

中村正加藤完治

二ノ二 山田鉢一

東郷外人

北辰會委員氏名

本學年に於ける北辰會委員左の如く任命された
り。

講話部委員 文三

增田惟茂

二ノ三 井坂勝三

二ノ二 岩田幸美

二ノ二 渡邊信吉

二ノ二 上杉復男

二ノ二 内田樸

二ノ二 衣斐清香

二ノ二 石黒文吉

二ノ二 高木靖彥

二ノ二 根津金吾

二ノ二 關谷吾一

二ノ二 小泉禎次

中村正加藤完治

二ノ二 山田鉢一

東郷外人

小澤民治

フートボール部委員二ノ二松橋好次郎

漕艇部委員 英法三

栗本瀨兵衛

二ノ三 小川信次

三ノ三 藤井正太郎

二ノ三 奥田祐安

二ノ三 山田正三

二ノ三 鶴尾正吾

天長節祝賀會記事

本校職員と生徒とに依りて發起せられし此會は
蓋し天長節の夜、秋季大運動會舉行後、運動場
に會し仕掛け花火を上げ、相會食し以て遙に瑞雲
たなびく東都に向ひ聖帝の御降誕の佳辰を賀し
萬壽の疆り無きを祈らんとするにあり。
然るに皇天の無情なる、此佳節に當り寒雲を送
り來り霧々たる秋霖を降らすこと頻りなり、遂

に運動會は延期され、祝賀會は其翌日、生徒控所に於て舉行する事となりぬ。

午後四時、職員生徒控所に會す、時は全く黃昏、ならずと雖、暗雲天を閉ざし、溟濛たる氣四壁を蔽ひ、自陰鬱の思ひあり、然かも我か熱誠なる四高生や既に場内に満ち、聖堯の壽を賀し、其王化に浴さんとするの意氣自ら此陰鬱を破りて歡喜の聲嬉笑の聲靄然として場内に溢れりき。

やがて今井委員長起つて雨天の爲め今日此會を開くの止む得ざる事を告げられ又蕭然として天皇陛下の壽を稱せらる。かくて折詰を配布す。仕掛け花火を靜勝館内に見に行くあり、心合へる友と場の一隅に會して折詰を開くあり。かくて六時頃兩陛下の萬歳を三唱し和氣藹々たる裡に散會したりき。

野人語

○世に二種の畸形兒あり。一は、則ち人間の踐む可き周道の岐路に立つて、右するを正とし、左するを邪とすれば、其中間の安路をとる。

則ち世渡りの上手の曲藝師なり。二は、則ち右するにあらず、さりとて左するにもあらず因循、踟躕して、ぶら／＼彷徨ひ廻る流浪人これなり。

○自恃獨歩の力なく、碌々人に依つて事を成し、人の脣に敷かれても反撥の元氣無く、他人の金囊に皿大の貪眼を注ぎ、事あるに臨みて、人間並に角を出せども物に觸るれば委縮して身をかくす。かくの如き人を名づけて蝸牛の人物と云ふ。

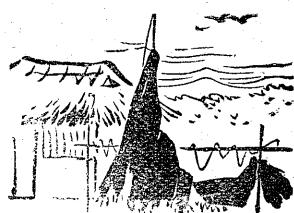
○元語駄辯を弄して以て自ら得たりとすれども其脇なく、度量なく、たゞ人並はづれて軽き人物と云ふ。

舌を繰るに妙ありと云へども、口を開く度毎に腐れたる肚の内見え透くを知らぬ男あり名づけて五月蠅的人物と言ふ。」

○人生の趣味は何ぞ。富にあらず 黃金にもあらず。「四想」「估價」「嗜好」「自修」にあり。人生の利器ともなる可きは何ぞ、才器の自覺、正しき視力と思想之力、これなり。

○文作を味ふの眼識なき世人は、端になき者に強いて好奇の心を満足せしめんとする。翻つて今日の文壇を想へ、所謂批評家なるもの斯文の爲めに議せずして自己の嗜好によりて是非し、黨派の爲めに甲乙す。輕薄の豎子、人に倚りて奇利を收めんとするや。

先世の懽心を買つて後已世に售られんことを異ふものあり。一片の眞骨あるの士は、腥羶に汚さるゝを惡みて、騷壇の外に脱せんとす嗟吁、痼疾速に瘳えずんば斯文界を奈何にせ



寮 報

臥出入等其時に違ふ可からず、

常に父母の安否を懷ひ状況を告げ其心を慰む可し、

九月二十二日午后三時至誠堂に於て新入寮生宣誓式を行はる。寮生一同席に就き、吉村校長、

舍監及び職員此に列席せらるゝや寮委員中野並助起つて時習寮箴規を讀む、曰く。

時習寮箴規

凡寮生たる者は吾校生徒心得の趣旨を躰し至誠以て智を啓き徳を修むるの基と造すべし故に、

心意を誠にし容儀を正うし言語を慎み苟も輕躁不遜の行爲ある可からず、

儉素を崇み奢侈を戒め質樸に就き須らく其分限を守る可し

攝生を慎み飲食を節し室内を清潔にし起

終りて吉村校長、寄宿舎生活に就き訓諭する所

あり。生徒監宮川先生次いで宣誓に付き説く所

あり曰く、古來宣誓と云ふものは最莊嚴のものならざる可からず、古人は天地に誓ふと云ひ、

八百萬の神に盟ふと云ふは蓋し宣誓の猥に輕んず可からざるの意に外ならず、近來宣誓の意甚だ輕用せらる、願くは今日只今行ひし此宣誓をして形式的のものたらしむる勿れど。

其より茨木教諭起つて留學中に於て觀察せられ

し英國二大學校を講話さる

唯今校長並ニ生徒舍監ヨリ御話カ有リマシ

タガ之ヲ諸君カ遵守セラル、ノ参考トシテ

私ハ英國學生々活ニ就キ一言致シ度ト思ヒ

マス

抑彼國ノ教育制度ハ我邦ヨリハ少シク趣ヲ

達ヘテ中學卒業生ハ試験ヲ受ケテ直チニ大

學へ入ルカラ丁度我高等學校ニ當ル所ノモ

ノガ無イノデアリマスガ我學校ノ教育程度

ト生徒ノ年齢ヨリ云フ時ハ寧ロ彼國ノ大學

ニ比スヘキモノガアツテ殊ニ德育ト云フ方

面ヨリ見レハ彼ノ有名ナル二大學即チヲク

スフオルド及ケムブリッヂノニツニモ例ユ

ヘキ点カアルト思ヒマス此ニツガ英國中他

ノ大學ト最モ異ル所ハ單ニ學術ヲ以テ唯一

ノ事業トナサズ之ニ德性ノ涵養ト公德ノ修

養トヲ併セ重ンズルノデアルカラ我々ノ學

所等ニ充テ時ニ又其一部ヲ教師ノ住宅ニ供スルナドニテ學校即チ宿舍、宿舍即チ學校ト云フ如キ有様デアリマス各學生ハ寢室ト自修室トヲ有シ調度ハ萬事非常ニヨク行届テ居リマス脩テ一日ノ暮シ様ト云ヘハ何所モ同シク割合ニ簡單ナルモノ、テ朝起出テ、身仕度ヨリ食事服裝ヲ整ヘソレヨリ各爨ノ禮堂ニ集テ祈禱ヲナシ次テ銘々ノ課業ニ從事シ了テ晝食ニ移リ午後若シ授業ナクシテ雨天ナラサル時ハ必ス運動ヲ爲スノテアリマス一般ニ行ハル、モノハくりけつと、デ之ハ英國々民遊戲トモ稱スヘキ程盛ンデアル又漕艇ヤてにすヲモ遊フモノアレハ自轉車ヲ以テ散策ヲ試ムルモノモアリマスガ一体學年ノ始マルノハ十月デアリマスカラ既ニ日ハ短キニ傾テ來春ニ至ル迄ハ余リ運動ニ適セヌ時節トナルガ然シ雲霧寒氣ノ厭ナ

ル傳説ガ自然ニ備ハツテ是カ精神ノ修養上非常ノ助ヲナスノデアリマス又各學府ニハ附屬ノ大圖書館ト博物館ノ有ル外ニ各蠻ハ大抵各別ニ之ヲ具ヘソレニハ自校ニ關係ノアツタ貴賤名士ノ遺物等ヲ遍ネク保存スル故ニ地理ヤ歴史ニ關スル智識モ自然ニ得ラル、事モアル加之歐洲ニ於ケル交通機關ノ發達ニヨリ英國ヨリ獨佛ヘ至ルノモ僅カニ一日ヲ要セサル程故實物ヲ見聞シテ活地理ト活歷史ヲ學フニハ最モ便利デアリマス是レ故ニ學生ノ學問ノ仕方ハ實物ヲ觀察シテソレヨリ書物ニ移ルト云フ風ガ自然ニ起ル即チ外界ヨリ誘ハレテ心的研究ニ入ルノ順序デ是ガ書物ヲ理會スルニ最モ早イ方法デス勿論之レーツハ英國ノ教育ハ實用ヲ重ンズル点ヨリ來ツタ結果デモアリマシヨウガ一ツハ又教育機關ヲ十分ニ備ヘテアル御蔭

ク運動ハ出來ルダケ行フノテアリマス歸舍スレハ大抵暮レ方トナリコレヨリ洗浴ヲ

ナシ衣服ヲ正シテ即チ晚餐ノ儀ニ列スルノトアル此晚餐ハ實ニ英國一般ノ最モ大切ト

考フル一事ニシテ家庭ハ之ニヨツテ一家和厚フスルニ最モ効力アル機關ノ一ト考ヘテ

居ル其レ故食堂ハ校舍中最モ重要ナル一室ヲ占メ往々講堂ヲ以テ之ニ充ツル場合モアリマス堂ノ四面ニハ多ク其爨出身ノ偉人名士ノ肖像ヲ連ネ又裝飾食器ノ類迄古來歴史付ノモノガ夥イカラ此席ニ臨ム者ハ皆自ラ一種ノ精神的刺擊ヲ受クル譯、古來英國ノ名士ハ多ク此牛津ヤ劍橋ノ門ニ入りタル人故教室ノ内外ヲ問ハズ大智偉人蠻雪ノ遺跡等ハ枚舉ニ違ナク且ツ其土地自ラ歷史上無數ノ事績ヲ収ムルモノカラ教育上結構ナ

デ所謂百聞一見ニ如カサルノ德ヲ収ムルモノト思ヒマスソレカラ又學生ハ書物ヲ讀ムニモ唯ニ字句ノ解釋ニ止マラスシテ之ヲ實地ニ引當テ、比較考察シ或ハ演説ニ或ハ討論ニ其所見ヲ披露シテ智識ヲ對比シ相互ヲ益スル事ヲ常ニ力ムルガ爲メニ又自ラ社會ノ事情ニ意ヲ止ムルヲガ多イト思ハレマス

實ニ此社會ノ事情ニ心ヲ寄スルノ風習ハ國民一般著シキ特徵デ私ハ曾テウエールズヘ旅行シタ折圖ラス片田舎ノ一老農ヲ訪タルニ彼ハ唯ニ園藝ノ一書ヲ繕クノミナラス又不完全乍ラモ當今英國經濟論ノ要旨ニ通シ之ヲ生存ニ欠クヘカラサル智識ナリト云ヒタルニハ只一感ノ外ナカリシ所、デス社會ノ上下ヲ問ハズ斯ク公共的ノ事柄ニ同情ヲ有スルノハ國政上直チニ利害ノ一身ニ及ブコヲ能ク覺ツテ居ルト云ハネハナラヌ故

ニ學生モ新聞雑誌ヲ嗜ム事甚シクテ學業ニモ爲メニ影響セんカト疑ル、程ダガソコハ社會力進メハ時間ニ對スル觀念ノ異ナルノ業務ノ何タルニヨラス如何ナル事情アルモ決シテ之ヲ廢スルノ憂ハ無イノデアル凡ソ外國デハ生活ガ困難デアルカラ金ノ價值ヲ知ル多ク且ツ大學或ハ他ノ獎學資金ヲ仰テ勉強スルノモ隨分ニアリマスカラ學生カ社會及自己ニ對スル責任ヲ感スルノ念ガ從ツテ深イノデアル即チ學問ニ對スル自己ノ慾カ强大ニナルカラ他ヨリ干渉ヲ逞フスルノ必要モ餘リナク從ツテ歛課欠席等ニ關スル査モ半分ニ行ハヌノデアリマス左レハ一見頗ル放任主義ニ流ル、様デアルガ決シテ然ウデハナイ學生カ大學地ヲ離ル、時ハ僅カニ一日ト雖學校ノ許可ヲ受ケネハナラヌ又舍監ハ終始市街ヲ巡邏シテ學生ノ体面

子女ヲ集メテ舟ヲテームス河ニ漕グノ元氣ガ有リ又劍橋ノスキート老師ハ車中未タ曾テ巻ヲ廢セサルノ姿デス此点ハ實ニアングロサキソン人種ノ恐ルヘキ特徴デ精神一到何事カ成ラサルベキノ妙理ヲ最モ平易ニ實現シタルモノト私ハ常ニ感シテ居リマンタ以上ノ如クニシテ出來タル所ノ人間ハ無論皆十分トハ評シ難イガ大体ニ於テハ一通りニ下ラザル學力ト又一通り以上ノ性格トヨ具ヘテ居ルノデアル其性格上ノ特質ヲ一二列ヌレハ義務ノ觀念カ發達セルヲ正直ヲ尙フ名譽ヲ重ンスルコ世事ノ利害ヲ感スルヲ等ニテ特ニ義務ノ觀念ト正直ヲ尙フ事ハ最モ著シキモノト思ヒマス然ルニ又獨立ノ精神ト師長ニ從順ナルト團體ノ動作ニ敏ナルノ点ハ又甚タ強イノデアリマス或人之ヲ以テ遊戲ニ負フ所少カラズトナスガ少クト

ヲ汚シ又日暮レテ後婦人ト同行スルヲ見レハ其何タルヲ問ハス一應ノ取調ヲ加フルノデアル斯ク一方ニ急ナル教育ヲ施シ之レト同士大學全体ノ分子間情誼ノ親密ヲ計テ社團ヲ組織シ之ニ依テ學校生活上一切ノ愉快ヲ與ヘ或ハ教授ト學生ハ時々會合茶話ヲナシ或ハ相携ヘテ園遊遠足ヲ企テ・樂ヲ共ニスル事モアリマス教師モ學生ト同シク學校ヲ以テ自己ノ研究所トナシ中ニハ恰ント學生ト同一ノ生活ヲ以テ終ル人ガ往々ニアル又英國ノ大家カ年老イテ後益壯ナルノ元氣ハ非常ニ多イノデ余カ知ル二三ノ例ヲ舉クレハ物理學ノ泰斗ケルビン卿ハ八十餘歲ノ高齡ニテ孜々尙研究ニ倦マス英文學ノ大家ダウデン師ハ六十歲ニシテ尙くりけつニ同情ヲ有シ同フアルニバル師ハ又八十歲ニシテ連日數里ヲ來テ研鑽シ閑日ニハ青年

アリマス

此講話や實に余等にとりて少からざる興味と教訓とを與へたりき、終りて佐野先生寮務に關し報告せらるゝ所あり、かくて此宣誓式は嚴肅に其式を終りたりき。

讃言狂語

我が忠勇なる百萬の貔貅、聖勅を奉じて、一葦帶水の滿韓の地に轉戰してより、皇旆嚮ふ所、山河斐然北狄遁亡、我が武威に刀向ふ敵なく暴戾劫掠屢くなき露助も舌を捲き尾を垂れて潰走し、或は、天府の地と誇稱せる旅順の關門を鎖して出でず、或は、奉天の孤城に蝟集して如何ともする術を知らざるものあり。あゝあはれなり木葉武士なる哉。日本刀の光芒離々、月に翳げば、秋水滴らむとして正氣あり。我が父祖これを腰にして、正義の爲めに鞘をはらひ、天の

命する所其の仇を研りぬ。今や新しき日本武士、これを振つてふりまくり俱に天を戴かざるの仇敵を寸斷し、撼天動地の偉業を成して地球上人類發展の一階梯を出現せり。あゝ壯なる哉、大和民族の發程！

今や我が國は列國環視の間に立ちて、豪然闊歩するに恥ぢざる大國民の資格を得たりと云ひつ可し。碧眼をして曉の空穹彩雲の裡に秀づる芙蓉の峰の如く瞻仰せしむる、近きにあらむ。あゝこの機この時、戰國の青年として、さる可き道やいかに。眞率に。然かも活潑々地時を提げ、世を濟ふの誠志は、恒に胸裡に燃え因循姑息、窘迫、卑劣、墮落の表に立ちて、頭角を擡ぐ可き則ち是也。この本領をして彌が上に發揮せしむ可きは、目下の急務なる可し。

天に聲あり。超百の寮生、何をか夢む、言はざるは何ぞ。活動せざるは奈何に。地に答ふるあ

り。言はざるにあらず。又動かざるにあらず。静學冥想、宇宙を靜觀して綽々たるなりと。暫らく瞳を轉じて榮華の巷、凡俗の界を見よ。「金力」と「甘言」とに眩暈せる脇なき人間、大片きつて廣言横行し、誇詐、諛諂てふ、稅のかゝらぬ專賣道具を巧みに弄して、輕業的生涯をごまかしつつあるを見ずや。

茲に、淨樂園あり。名づけて時習寮と言ふ。北辰直下、白嶺の皓雪を仰ぎて霸氣を養ひ、利刃を磨く、鳳雛龍兒、合せて二百。俗氣と絶縁し、尾山城の翠松、常盤の色を彩し、常住の月をかくる如、不滅の元氣と高崇の綱領とを保持して、北陸に雄飛する何ぞ其の壯なる。何ぞ其の優なる。今吾等はこの樂園に、高く天日を貫く、希望を秘めて、力靜に養はんかな。(紫雲生)

時習寮宣誓式後、直に食堂に入り、山海の珍味に胃を驚かしつゝ、暫時休まんとする閑もなく、寮の鐘聲は響き我を無聲堂裡に誘ひぬ。此處ははや會場掛の苦心にて幕を廻らし柱を飾り、花を生けし用意周到なり、やがて白上寮委員得意の雄辯を以て開會の辭を述ぶるや、此に第一回時習寮の茶話會は開かれき。

舊寮生の演説に次ぐに新人寮生の演説を以てし人々漸く興に入る折柄、茶菓の配布あり、さしも靜かなりし會場忽色めき立ちて騒ぎ出でしは流石に人は正直なるものなりける。

やがて帷帳もて造られし白幕あけらるゝや、赤毛布と布呂敷の袈裟嚴めしく、法徳高きいと殊勝げなる僧と、チヨコチヨコと狸の化けたるにはあらずやと、思はる、子僧出場し来る。此に和尚殿讀經し佛法の難有さを説いてしかつめらしき顔をなす頃から、商人体の旅人、いそがし

第一回小茶話會記事

げに出で來り、先づ子僧を見るや其頭を撫で、
「大きくなつたな」と和尚に面會を求む、和尚之
を聞き困却したる思ひ入れあり、子僧をして留
守を遣はしむ、商人之に閉口せず何時迄も待た
んと云ふに満々面會す、時好の挨拶終りて旅人
何物を求むる如くもじもじし居たりしが漸く思
ひ切つたる風にて「先日預け置いた百兩を返
し下さい」と云ふ。和尚は平然として「すい分
此頃は暑う御座います」など、白を切る所、
此和尚中々の人物と、見物一同拍手する事頻な
り。

旅人遂に大聲を擧げて吐鳴れども預からずと云
いて金を出さぬに詮方なく「裁判に訴へるから
覺えて居ろ」と云ひ置きて出づ是にて一幕終る。
又幕明くや此處は裁判所の場なり、裁判官二人
禮服を着、威容端然として卓を前にひかへ居る
所に、醫者と一坊主との訴訟あり結局坊主の勝

ちとなり退場、其次に漢法醫と巧に金澤
語を遣ふ百姓出で來りいろく訴ふる所ありし
も遂に漢法醫の勝ちとなりて退場、かゝる折か
ら例の商人、狼狽の体にて前後も顧ず出で來り
唯口に百兩とばかり繰り返しつゝ裁判所の前に
來り裁判官に泣くが如く恨むが如く訴ふる所あ
り。裁判官は鬚をひねりつゝ暫時考に居たり
しが何か妙策を思ひ付きたらんが如く膝を打ち、
先づ我に妙計あれば明日行きて再び催促す可し
此度は其和尚も心地よく渡さんと云ひ置きて旅
人を退場せしむ。

げに茶番は都合好きものなれや、例の和尚殿は
かくとも佛ならぬ身の知る由なく端然として出
で来るを裁判官呼び留めて貴僧に依頼し度き事
あり、そは別儀に非らず貴僧の正直なるを信用
して世にならび無き寶を預け度しと云ふ、和尚
は思ひも掛けぬ幸ひに心中喜びつゝも左りげな

第一回講話會記事

秋風堁々、露氣流露す。吾人の鐵鞭一たび鳴ら
ば、倦鶯ために立たむ。時維九月朔日后六時、
第一回講話會は、開かれたり。是れ、未曾有の
盛舉、破天荒の壯觀たるを失せざるが故に後の
語草とせばやと、吾が驪げなる記憶を呼び起し
て以て、當時の偉觀を略述せむ。先、虹霓の氣
を吐露せられたる我寮中の濟々の辯士、論客の
玉名を連署せば、

開會の辭

河村幸一

水

河合良成

宇宙組織の二大方面

香川健爾

正大の氣

吉野勝六

覆面の行脚

高橋武濟

無人

中村祐海

皆寮中の名人揃ひの事とて満塙酔へるが如く又
抱腹絶倒する事數十回。かくして和氣藹然たる
裡に寮歌を歌ひつゝ散會したりしは即に十一時
を過ぎて老杉の影巨人の如く闇中に立てる時な
りき。

秋感

松井貞太郎

毀譽褒貶に心を動かす勿れ

人材論

楠木福松

其樂説

栗野傳次

白禍

品川主計

俗謡の研究

森岡二郎

自己擴張

岩田幸美

巨人論

中村正

右の如し。今其の名論卓説を簡単に記るさんに、川村君は曰はく新寮生諸氏互に塗入視して、初の程は、なにとなく白けきみにて調子合はず、かくては、とても理想の寄宿生活を行ふを得ざる故、其の接觸の好機會を與へざる可からず。則茶話會、講話會、これなり。今日この會を開きし理由の一つは茲に存すと。熱切に講話會の由來効用を説明せられたり。次に河合君は、水

と文明史との關係より論じ出して、水は人間の品性、個人的發展に影響を有すと云ひ、更に其の詩的なる趣味ある点を指摘して餘溢なく、其の言中君獨特の滑稽を加へ、聽衆をして、倦怠せしめざりき。香川君の論題は、頗る的なり。されど其の言ふ所を聽けば、御歯に合はぬ所とてはなく、洒落、圓轉、咄々論じ來りて首尾一貫、一糸紊れず、宇宙組織の實體は如何。唯物、唯神の二方面を簡説し、一言一句吾等の意を得たり。さるに口さがなき京童は、「坊さん臭きぞ心にくき」といしれり。吉野君の演題は正大の氣と言ふ。我國先天的の美風は、西洋文明の爲めに、鎌を生じたりと痛論し、吾人は益々この正大の氣を發煥して、國威發揚に盡瘁すべきなりと論結せられ、次に高橋君は、「人間の粹美たる青年にして其本領を放擲し然して修養時代を空々過するものあり。かゝる奴輩は女々しき腐

腸漢に外ならず。瓦の家根を支ふるものは、竹の柱にあらず。これと同じく、修養なきもの、いかで瓦の家根を支持するを得む」と侃々の壯語、諤々の厲辭、懦夫をして立たしむる慨ありき。竹田君は嘗て實驗せられし滑稽旅行を面白をかしく述べられ、中村君はこの濁溷せる社會に一人も人物らしきものなしと斷案を下し、今後第二の國民となる可き吾人青年は今より智能を啓發して以て、德器の成就を心がく可しと論じ、松井君は「秋は人に覺悟の念を勃發せしめ、悲哀の念は一步進んで、奮發の心を起さしむ。進取の氣は反省より出づ」と言ひ、栗野君は今

し書生節をあげて、學生の品格、氣風の年月と共に墮落し行くを痛嘆せられたり。品川君は憤然として昇壇し黃禍に對して白禍を疾呼せられたり。(以下略)

夫れ、文は、言の精、正氣其の源たり。詩は、性の華、天葩を發き、鏘々の聲をなすものなり。然らば言論は如何に、曰はく、言語は天機自ら發したる眞響なり。言論は末枝のみ、時代言論の傾向、人文世運の趨勢を指定するものなり。とせば、花謝水流、煙霧雲霞に附して過看すべきものにあらず。あゝ三寸の舌、虐待すべきものにあらざるなり。

第一回大茶話會、佐野先生

送別會記事

洋にては、世界的志想活く、これが爲めに東洋人は、其樂の如何なるものかを知らずと云ひ、森岡君は、明治の初代より今日までに流行せられ

賀中學校に轉任されしを送るの會なり。五時の號鐘と共に待ちに待ちたる察の若武者は食堂として潮の如く寄せかけぬ、かくて職員と共に樂しく食事を終り直に無聲堂に赴く、例の如く菊花もて造られし額、杉もて飾られし柱など會場掛りの苦心さこそと思ひやられぬ。

關谷寮委員先づ起つて開會の辭を述ぶ。終りて宮川生徒監、佐野先生を送るの辭を述べられ、續いて寮生總代の送別の辭を關谷寮委員朗讀し其より井坂、中野、白上の諸寮委員舊寮生たるし、東西大學生の送別又は電報を朗讀しき。又在本校舊寮生の總代としては獨法三年野田敬之助氏出で、莊調なる語氣を以て佐野先生の行を送るの意を述べらる。此に於て佐野先生悠然立つて感謝の辭を發せらる、其言や悲淒の調を帶び謙遜の音を含み在勤十年何等の功績なきを告げ此の如き盛大なる送別會を特に舉行されし

巡、次に許遠、稍下手に萬春、皆擊劍の道具に身を固め、威風四邊をはらふ許りなり。張巡慨然として曰く今や敵兵城を籠むこと數月、食ふに餓なく進退正に谷まれり、誰れか我が爲めに進明へ使するものぞと、一壯士あり墨黒々と書き晴雲是なり。張巡之を嘉して使とし行かしむ。かくて彼の歸る間、諸將交々感慨を述べ悲壯の涙にむせぶ處にて幕。幕代れば此處は張巡の妻の居間なり、張巡の妻、机に對し遺書を書き獨語して曰く、我が良君始め諸將皆忠義の爲めに務め、今や餓なくして死せんとす、城中に在りても益なき妾願くば我が肉を以て勇士に奉らんと、長き袂を眼に當てゝ啼泣す、其服裝を見れば、藤紫の上着に、黒紋付の衣服白襟を優しく重ねたる所、天晴愛國婦人會の名譽會員とぞ見へたりける。やがて短刀を出して喉をつき自殺

す、折柄馳せくる張巡、我が妻早まつたりと許り抱き上げつゝ、丈にも餘る書き置をひろげて悲嘆の思ひ入れあり幕となる。やがて幕代るや、再び城中諸將の會合となる張巡、一皿の肉を持ち來らしめ涙をぬぐつて曰くこは我が妻の肉なり、彼亦義の爲めに死して肉を我等に奉らんと云ふ願くば將士賞味せよと、將士皆曰く烈女の肉を賞味せんと、此時晴雲歸り来る、甲冑いたく亂れしにても苦戦の程ぞ知れたる。彼曰く進明に至るや彼等肉に倦き酒に満ち唯一日の安を

は實に恥ぢ入る次第なり猶今後も將來の厚情を祈ると云はれぬ。其時や多感なる先生の眼中に涙あるを見、余等亦潛然たりき。折柄一小漢の會場に出で来るあり、中央に端座す、是れ誰れぞや實に寮の小使柿澤なり、蓋し柿澤や寮に精勤する事此に十二年、其間一の私なく彼の働くや眼中唯寮の福利のみ、實に賞す可く感す可きものは彼なり依りて寮生一同彼に與ふるに聊かの金額を以てし今日の會食に列するを得ざしむ、今會場に現はれしは蓋し其謝辞を述べんが爲めなり、異様なる彼の金澤辯の辭終りし時、寮生は盛に拍手を以て喝采せしも亦宜なりと云ふ可し。

寮生の有志演説も終りし時、忽白幕は場を斃ひぬ、蓋し余興に移るなり、衆更に喝采して之を迎ふ。やがて幕あく、此余興題して唯陽城と云ふ、唯見る唯陽城中の景、上座に控へたるは張巡の有志演説も終りし時、忽白幕は場を斃ひぬ、蓋し余興に移るなり、衆更に喝采して之を迎ふ。やがて幕あく、此余興題して唯陽城と云ふ、唯見る唯陽城中の景、上座に控へたるは張

士あり、卓に倚り、一人は椅子に腰かけ、一人は立つて頻に講義をなしつゝあり。曰く、近來歐米の科學進歩し催眠術の如きに到つては實に長足の進歩をなせり、余や獨逸に在る事數年此技を學んで既に神に入る是を疑ふものは試みよ。と皆是を疑ふと雖我れ實驗されんと請ふ者なし。一大學生あり進んで我れ是を受けん、但し若し實驗成功せば願くば我が欲する所を聞けど。博士之を諾しやがて術を行ふ、忽ちにして博士の精神は學生に宿り、學生の靈魂は博士の体中に在り、然かも他の大學生は之を知らざるなり。幕代りて大學生級會の場となる諸大學生大に論談せる所に彼博士既に學生の精神宿り居れば、僕亦又効舞せんと荒れ廻る他の大學生は事情を解せず日頃にも似ぬ博士の舉動やと呆氣にとられしはかりなり。かくして公園の場となる例の大學生は既に博士の心入り居れば大威張りて散歩

し大學生に逢ふては其敬禮せざるを教師に對して無禮なりと憤り大に叱責して身亦學生の服裝をなるを知らず忽争亂起りて幕。やがて博士の宅となる、例の博士にして心は學生なる先生出で來り博士の夫人に對し頻に禮をなし又令嬢に對しても亦敬禮をす、蓋此學生は博士の令嬢に戀せるもの先きに實驗成功せば要求する所あらんと云ひしは實に此事なりしなり。夫人は余りに自己の良人が己に對し恭しきに驚き居る様あり、やがて彼服裝は學生にして心は博士なる男も出で來り双方混亂して制止する所を知らず、互に騒き居る折しも一幕目に列席せし一博士、悠然として出で來り、即二人を連れ來り催眠術を解く、各元の身體にたち返り、博士は自己の夫人を顧みて、是は愚妻でなぞ、濟ました顔をし、彼學生は博士の令嬢を見、互に恥しき様をするなどの笑止しみあり。彼一博士即

曰く實驗も無事成功したれば彼學生の要求を容れよと即催眠術博士も之を諾するや、今迄恥しげなりし令嬢忽ち走つて彼學生に寄り添ふ途端忽暮と成り終りぬ、滿場の笑聲、屋根瓦を破損せしめん許りなり。かくて次に白上祐吉氏の巧妙なる獨り狂言あり、又寮生をして抱腹絶倒せしめき。

夜既に更けぬ宮川生徒監起つて四高万歳、時習寮万歳を三唱し終つて寮生一同寮歌及び校歌を歌ひつゝ談笑の裡に散會したり、古濠の老松、颯々として夜風昏く、尾山神社のほこりなる桺樹に鳩鳴を聞けり。夜半、興未だ散せざる面々盛に嵐を起して各寮の廊下を踏み鳴らし時ならぬ雷聲を轟かせたりしき。

武道仕合

寮仕丁柿澤半平の事

我が寮の名物男よと永く歌はれたる小使は誰、彼の天狗にあらず、米搗にもあらず、則ちかの

朔北の今日や如何に。寒草枯れ、水聲死し、殆ど零度に垂んとする北地の寒烈を凌いて、軍荼利夜叉の大旗を翻へし、意氣高く牛斗を衝くものはこれ好箇の大和眞猛男にあらずや。浮華の風にふかれ、花に浮かれ柳に狂ふ紛々たる痴兒迂夫、希くは恥を知る處あれ。この機四高の健兒殊に其の中堅となり其の代表者として世に誇れる時習寮生、いかで黙せんいかで眠らんや、柔道紅白勝負は十月十五日、剣道紅白勝負は、十月二十九日を以て行はれたりき。龍驤虎搏の壯觀、天下の壯事、述ぶるに言葉なし。寄語す金城々下の健兒、詩人をして倡優巧兮、鉄劍鈍と歌はしむる勿れ。

通稱をマイナスと呼ぶる、無邪氣の老爺其の人なり。姓は柿澤名は半平。今年とつて六十三歳今に瞿鑑として、身にあまる労働をなす、何ぞ其の神妙なることよ。茲に吾等は彼の忠勤を嘉して以て彼が賽布を温暖ならしめんとて慈光あらたかなる寮生諸君の五色の糸に絶り若干錢を得たれば其の半ばを養老金に加へ半ばは、彼が幾日かの糧に供する資と爲さしめたり。あゝ彼が欣喜、彼の家族の抃舞の状いかなりしど。

寮の天長節

上九重の空瑞雲祥氣昇り下白屋の蒼生、君ヶ代の曲に和す。この佳辰に對して聊の祝意を表せん爲めに我寮に於ては、各寮ともに室内裝飾を爲せり。其の重なるものを枚舉せんに、

南寮にては九號室の古城の秋最も見るべく、冷寂たる城の松にかかる月遠き昔を語るらし、南寮の壯觀云ひ

中寮にては、八號室の繪畫展覽會は全寮の白眉と云ふも過大にあらざるべし、宛然これ小白馬會を見るが如し。

八號室のパノラマ一寸人の目を曳き、壹號室の「主人留學中につき茶菓の餐應は謝絕す」てふ振出の滑稽なる注

意を惹きたり。

繪は羽下君のものせられしき聞く好囃々、四號室の傾國病寄なり怪たり。拾貳號室の新式砲時節柄よき考案にて

其の材料の異様なる却つて價値あり、其説明に曰ばく、百萬のスラブを震駭せしめカイセルの胸底を射貫くべく

「再び議會を解散せしめ經費節減の結果幾多の官吏を路頭に泣しめし砲、今や正に功を遂げたり、更に未遠く、

時習式十ニ時半砲」さ。北寮にては三號室の西行さ富

嶽北寮唯一の大作其寒僧及び、芙蓉の位置ともに妥當を得たり。五號室の Potatohall 多くの賓客を招きビンボン俱樂部は、盛況を呈せり。

拾一號室は風流古雅。室長小和田君妙珍の御手になりしこ云ふ活花一層の美を添えつ拾號室の内かめの掛地をまつれる突梯滑稽の極。(紫雲)

明治三十七年度北辰會豫算報告

收入之部

三十七年度豫算

第一款 経常收入	一一五〇〇
第一項 特別會員寄付	二〇〇〇〇
第二項 通常會員會費	八七・五〇
第三項 預金利子	五・〇〇
第四項 春季運動會乘艇申込料	二・六〇
合計	一一五・〇〇
支出之部	
科 目	三十七年度豫算
第一款 経常支出	九九四・六九
第一項 講話部費	二・〇〇
第二項 演說討論部費	三・〇〇
合計	一一五・一〇

科 目	三十七年度豫算
第一款 経常支出	九九四・六九
第一項 講話部費	二・〇〇
第二項 演說討論部費	三・〇〇
合計	一一五・一〇

會債償却 明治三十七年度

百十六

科

目

三十七年度豫算

佐

校友會雜誌

第三號

岡山醫專校同會

賀 第四三號

佐賀鄉友青年會

第一三七號

第一三八號

第一高校同會

沖繩中學校同會

第七高校造士館

大坂高商校友會

第六高校同會

三重第一中校同會

岐阜中學校同會

京北中學校同會

第三高校同會

廣島中學校同會

明治義會中學校

金澤醫專校同會

東京高商校同會

躬行會

山口高校同會

通常會員臨時會費

前年度殘餘繕入

合

計

支

出

借入金元金償却

借入金利子償却

借款金償却

借款利子償却

借款金利子償却

借款利子償却

七 生

第一號
島根第三中學同會

無 燈

第七號ヨリ
第一〇號

同

社

同窓會報告書

第三號
第一三號

安積中學校同會

同

校友會雜誌

第一五號
第六三號

輔仁會雜誌

第一六號
第二五號

尚志會雜誌

第六一號
第二二號

第二高校同會

佐賀中學校同會

榮

第二三號

城

佐賀中學校同會

附

錄

卷之二

卷之三

卷之四

卷之五

卷之六

卷之七

卷之八

明治卅六年中本校圖書館

增加書目

第一門、哲學類

ケーベル

哲學入門

全 上

哲學史講義第二卷

シユウエーグレル

哲學史

クーノー、フッシャー

近世哲學史スピノザ

全 上

全上ヘーゲル

ドイセン

哲學史第一卷

ウント

哲學入門

全 上

ジーベック
システムデルフィロソフィエ

ヨードル

心理教科書

エルサレム
心靈敎科書

ウント

心靈學摘要

全 上

生理的心理

ミュンステルベルヒ 心理學グレンンドリス第一、
ヘフチング

アダムスミス セガリーナフモーラル、センチメンツ、

ケル子ル 教育小史

ヒッポー

靈國一般教育論

フォンス

祈禱論

クラーク

基督教論

ドラモンド

精神界ニ於ケル自然法

ベットラー

アナロジーヲフリリジョン

ゼームス

バライチースチフリッジヤスエキスペリメント

ケーベル

審美學講義

プラトー

リパブリック

セレクションス

西洋哲學史

大西祝

松本、木村譯 プラトーン全集第一、

中島泰藏

心靈學綱要

大西祝

論理學

元良勇次郎

倫理及宗教

坪内雄藏

通俗倫理談

大西祝

倫理學

木村鷹太郎

東洋倫理學史

兒島頤齋 喻草

國府寺新作 獨逸善督西教育新史

附 錄

鈴木力譯 教育哲學年表

田所美治 菊地前文相演說九十九集

村上專精 佛教統一論

英朝禪師

禪林句集

横川藤太郎

眞宗聖教大全

ヘル子ス 太古ノ人類

ダウソン 都市及地方ニ於ケル獨人ノ生活

デモレン アングロサキソン人ノ勢力

ホルンハック 一般政治學

シジウイツク 歐洲政体ノ發達

コツサ 經濟學

カオルカ一 經濟學

グントン、ロビンス 社會經濟

コツサ 經濟學アインライツング

パツテン 繁榮論

マイエル 獨逸行政法

リスト 獨逸刑法教科書

ホルチエンドルフ 法律辭典

ピゴット 私犯法ノ二編

レーンホルム 日本商法
アルント パンデクト教科書
ホワルトン 法律辭典
マチアス 民法教科書

カーティス 富ノ福音
キユルシユ子ル 實業ノ帝國

遠藤隆吉譯 ギツチングス社會學
矢野文雄 新社會

大鳥居秀三 人類界ノ現象
國學院 法制論纂

小野塚喜平次 政治學大綱
鈴木純一郎 勝利論纂

鈴木駒治譯 ボルンハック國家論
國學院

小野塚喜平次 政治學大綱

伊藤正 高等租稅原論

三浦新七 商業經濟學

伊藤正 經濟學講話

田尻稻次郎 銀行ニ就テ

田中、穂積 經濟學要義

松崎藏之助 勝利論纂

鈴木純一郎 政治學大綱

全上 二十年來經濟世界ノ景況

望月常譯 森林經濟論

高岡熊雄譯 デルゴルツ農政學

岡崎遠光 銀行政策

草鹿丁卯次郎 歐米株式會社要解

依田昌言譯 工業的勞動者問題

佐野善作 銀行論

關一 コルソソ交通政策

安田登 經濟學提要

鹽島仁吉 廿七八年戰役后ノ財政及經濟

氣賀勘重 フィリップハウイツ經濟原論

堀江歸一 ダンバー銀行論

福田徳三 國民經濟原論第一卷ノ上

富井政章 民法原論第一卷

林田龜太郎 衆議院議員選舉法論

柳田國男 產業組合通解

圖師庄一郎 獨逸行政法

美濃部達吉譯 獨逸行政法

有賀長雄 日清戰役國際法論

栗津清亮 會計法會計規則通義

内閣統計局 第廿二統計年鑑

第三門、歷史地理類

ビルドレス 日本古今記

ローズ プハルツ

スペンス スオーボダ

ダット ゴハ

ストリーナフ子ーシヨンスノ内 英國教會史

スティーブンス 希臘史

スティーブンス 印度ノ文明

スティーブンス 羅馬史

スティーブンス 犹太人

スティーブンス 日耳曼

スティーブンス カルセージ

スティーブンス 歷山帝國

スティーブンス 西班牙ノムーラ

スティーブンス 右代埃及

スティーブンス 匈牙利

スティーブンス サラセンス

スティーブンス 愛蘭

スティーブンス カルデヤ

スティーブンス ゴス

スティーブンス 亞述

スティーブンス 埃及

スティーブンス ベニス

スティーブンス 十字軍

スティーブンス ベザック、インザヤ

スティーブンス 西印度

スティーブンス ポヘミヤ

スティーブンス バルカンス

スティーブンス 加奈陀

スティーブンス 英領印度

スティーブンス 近世佛蘭西

スティーブンス フランクス

スティーブンス 支那

スティーブンス 近世西班牙

スティーブンス 近世以太利

スティーブンス 諸威

附

錄

和蘭 中世佛蘭西

波斯 ハンサタオ

アーリー、ブリテン メヂア

シシリー ハニシタオ

ビザンチン帝國 フヒニシヤ

墨西哥 露西亚

羅馬帝國ノ猶太人 薩格蘭

羅馬 蘿西

葡萄牙 瑞西

ノルマンス 蘿西

タスカン、リパブリック ノルマン

波蘭 ノルマン

パレシャヤ ノルマン

リビングトン パリオヅヨーロピアン、ヒストリイ

ハインチエ ヒューム

ケラント ナホッド

マイヤー ヒューム

中世及近世史 ナホッド

世界史 ヒューム

革命時代 ヒューム

佛蘭西王國 ヒューム

師範學校用萬國史 ヒューム

近世史史料 ヒューム

荷蘭東印度會社ト日本トノ關係 ヒューム

合衆國 ヒューム

歴史教案 ヒューム

カソニング ヒューム

スチールマン 伊太利統一 ヒューム

ムルドック 日本歷史 ヒューム

ケムブリッジ近世史ノ内 文藝復興 ヒューム

合衆國 ヒューム

カソニング ヒューム

スチールマン 伊太利統一 ヒューム

ムルドック 日本歷史 ヒューム

合衆國 ヒューム

五

附 錄

六

- | | | | |
|--------|-----------------|--------|----------------|
| シユワーン | 世界史 | クローン | ゼ・リットル・ロンドナー |
| ホツダア | ライフラエ・センチュリー | 同 上 | ジアマン・デーリー、ライフ、 |
| ショース | アウトラシヤ | ダイエル | 英國風俗 |
| カシアン | 高等科地理教科書 | 野々村戒三 | 十九世紀外交史 |
| キルヒホーフ | 學校用地理 | 平田 久 | 同 上 |
| ダビッドソン | 臺灣志 | 高田早苗譯 | 歷史及地理講習會 國史講義 |
| スプルーチル | 歷史地圖 | 五十嵐篤好 | 神代卷系圖 |
| ノルマン | オール・ゼ・ロシアス | 未 評 | 保元物語 |
| シムス | リービング・ロンドン | 同 上 | 西洋史講義 |
| ラーチェル | 政治地圖 | 松村介石 | マッカーシー英國近代史上 |
| ルグラー | ゼ・ウエップ・チフ・エムバイア | 同 上 | 世界史 |
| ハーン | 西比利亞旅行 | 坂本健一 | 聖人ソクラテス |
| シーボルド | 佛領西印度ノ二年 | 同 上 | 以太利史 |
| ドイチ | 最後ノ日本紀行 | 牧口常三郎 | 大日本地誌卷一 |
| マルテンス | 西比利亞ノ十六年 | 黒鶴會 | 人生地理學 |
| ターニベル | 歴史地理トノ關係 | 大橋乙羽 | 露國東方經營部面全圖 |
| ジヨーッ | エリサベス時代ノ英國 | 紀成虎一譯 | 池邊義象 |
| フェアホルト | 英國服裝史 | 戸水寛人 | 歐羅巴 |
| | | 坂本健一 | 東亞旅行談 |
| | | 小泉安次郎 | 將軍ノ半面 |
| | | 金子 晋 | 歐山米水 |
| | | 井上通泰 | 歐羅巴 |
| | | 横井時冬 | 外國地名人名辭書 |
| | | 日本工業史 | 帝國出版協會 |
| | | 名著文庫 | 日本史籍年表 |
| | | 今昔物語選 | 坂本健一 |
| | | 外國人名字彙 | 外國地名人名辭書 |
| | | 教授法研究會 | 日本事物起源 |
| | | 外國地名辭彙 | 蕃山考 |
| | | 歌舞岐年代記 | |
| | | 立川焉馬 | |
| | | 歌舞岐年代記 | |
| | | 鷺尾順敬 | |
| | | 歌家人名辭書 | |
| | | 秋里籬鳴 | |
| | | 世語雜話 | |
| | | 神澤其綱 | |
| | | 翁草 | |
| 宇都宮書店 | 金澤市街名勝地圖 | 同 上 | |
| 博愛館 | 五十萬分一大日本全國中部 | | |
| 宗孟寬 | 日清韓三國輿地全圖 | | |
| 富山房 | 最新日本地圖 | | |
| 郷岡良弼 | 日本地理志科 | | |
| 厚譽春鸞 | 觀音靈場記圖會 | | |
| 日本經濟會 | 西比利交通大地圖 | | |

附 錄

八

堀田璋左右	日本歴史地理要覽	ロムメル	實驗物理(英譯)
郁文舍	世界歷史辭典	ドルーデ	エーテルノ物理
村岡素一郎	史疑	パリー	繪具化學
遠藤隆吉	支那思想發達史	クラウヒ	無機化學
坪井九馬三	史學研究法	アレニウス	電氣化學教科書
デコムブルース	高等代數	ニュース	無機化學教科書
メロー・ア	高等數學	リヒテル	化學的試藥試驗
バルフン	橢圓函數	ジヨーンス	實地無機化學
カルノア	分拆幾何	木村駿吉	磁氣及電氣
ラム	インフヒニテシマルカルキュラス	横山又次郎	天文講話
ピアーソン	エロースラジヤッジメント	三澤力太郎	天界之現象
ハミルトン	四元法	高松	化學語彙
バイエルリー	微分	木村駿吉	實地無機化學
同 上	積分	ナツチエル	地文
ラム	水力學	ジユーラクス	地質學及古生物學史
アルグウス	物理	サイリヤムス	古生物學教科書
ワットソン	物理	マイエルス	地層學序學
フリッゲ	微生物	ヨセフ	地質學及古生物學史
ラインケ	人体解剖教科書	サーストン	マテリアルラエンジニアリング
メーレル	顯微鏡的藥効學的實習	エヴァイング	蒸漬機關
市村 塾	動植物字彙	ヌゼント	測量機械
マイエル	自然之力	ベーカー	建築術史
中川源三郎	天氣豫報論	ヨセフ	建築術史
横山又次郎	地學概論	フリードレンデル	樂譜
岩崎灌園		ラフエストル	歐洲繪畫·荷蘭之部
安東伊三郎	生物界之現象	工業雜誌社	工業須知
石川千代松	進化論	實業學務局	工業學校機械製圖教授要目
五嶋清太郎	實驗動物學第二卷	松尾哲太郎	機械設計製圖學初步
丘淺治郎	進化論講話	工業雜誌社	船用機械圖
同 上		井口在屋	ぬのくち簡易表
嵩山房		藤岡作太郎	近世繪畫史
齊藤秀三郎	冠詞用法	齊藤秀三郎	泰西名畫集
三好 學	植物生態美觀	同 上	動詞用法
川上瀧彌	花	同 上	動詞種類
石川千代松	進化論	同 上	不定詞分詞
第七門 工學類			
第八門 文學			

磯部綱一郎

英文學講義錄第一卷

ルース

テニソン

プロント

ジエーン、アイル

ゼロールド

ゼ、ハンドブックラス井ンドリング、

ランドール

イマジナリー、コンバーセーション

同 上

ローウエル

ビグロー、ペーパース

ミルトン

散文拔萃

モーア

ユトピア

クラーク

ボリチカル、オレーシヨンス

ホーリットマン

スペシメン、デースインアメリカ

ハーン

コットー

齊藤秀三郎

動詞

ミューレル

助動詞

同 上

法及時

三省堂版

イージー、ステップス

同 上

ヒストリカル、ストリース

同 上

プリセプツ、チン、エコノミー

同 上

ウサンダー、ブック

同 上

上

ミルトン

ゴーリード、スマス

サッカレー

デッケンス

ドライデン

クーパー

バーンス

シェーレ

マシュー、アルノルド、

ロバート、グラウニング

ジョージ、エリオット

英國十八世紀雜學文學

英國十九世紀雜學文學

書翰

論文及書翰

愛蘭神仙譚

小品文

チンドルエンドヘルムホルツ

丸屋

興文社

ボーンス

プローズエンドポエトリー

ジョンソンス、テーブル、トーカー

三省堂版

ゴトルドン、リーブス

ヒストリカル、スケチエス

ゼグレート、イベントインヒストリー

コヨイズ、デールス

スペシメンスラシヨートストリー

ウオード、ウイ・ミスニース

セルフ、カルチベーションイングリッシュ

カラクター、エンドデューチイ

グード、マンナース

アラビヤンナイトノーマーチャントエントニエス

英文豪列傳 バーク

同 上

ジョン、ラスキン

同 上

ティソーン

同 上

バイロン

同 上

スペンサー

同 上

スコット

同 上

マクベス

同 上

ハムレット

同 上

米國文學史

マラット ミストル、ミッドシップマンイージー

齊藤秀三郎 名詞ト冠詞(ハイヤー、レッソン、第一)

スコット文庫 フエアリー、エンドフォルク、テールス

ホルス エマーソン及グリム通信

バーカー ガイド、ワーゲン、ベスト、フィクション

パルグレーブ ゴールデン、トレジュリー

スコット文庫 バイロンノ書翰

ワインゾルセークスピア ジュリアス、シーザー

トメント

齊藤秀三郎 英作文教科書

フローレンツ 獨逸文學拔萃第一

フレー ウンデード

クレー 獨逸文學史要

カエーベル 獨逸文學史讀本

ヘルセン ワンド、ゼルデル

クルーゲ 獨逸詩拔萃

同 上 獨逸國民文學史

ヒルツ 獨逸讀本(版)

エンゲリエン 高等學校用讀本

エンドルフ 読書ト教育二付テ

エンドルフ 全集

クーラーク 獨逸國民文學史

クーラーク 第五讀本

クーラーク 路易十四世時代

クーラーク ポルテール

クーラーク フルナック

クーラーク ハルナック

クーラーク エッセイ、ウント、スツーデン

クーラーク 成熟時代ノゲーテ

クーラーク ヴーラグ子ル

クーラーク フラント

クーラーク ボツラ

クーラーク ブランデス

クーラーク 獨逸文法屈曲變化一覽表

クーラーク フラント

クーラーク フルナック

クーラーク ハルナック

クーラーク エッセイ、ウント、スツーデン

クーラーク 成熟時代ノゲーテ

クーラーク ヴーラグ子ル

クーラーク フラント

クーラーク ボツラ

クーラーク ブランデス

クーラーク 獨逸文學抄

クーラーク 諸國物語

クーラーク 国民文學庫

クーラーク 佛文學抄

クーラーク 佛國文學

クーラーク ポアロー詩論

クーラーク コルニユ、ボリューケト

クーラーク モリエール、ルブルジア、ゼンチルガム

クーラーク リチャード・リギルール

クーラーク パルカル、パンセース

クーラーク ユーゴー、アトラバース、ゾンオーフル

クーラーク ゲーテ、ミグノン

クーラーク ダッケンス、クリスマス

クーラーク セルバンテス、ドンキホーテ

クーラーク ハウプトマン、アインザーメ、メンジエン

クーラーク ジューデルマン、故郷

クーラーク リックマン、現今ノ獨逸劇

クーラーク ルードウイヒ、全集

クーラーク ヘッベル、全集

クーラーク ナットラー、聖曲

クーラーク プツチエ、高等學校用拉丁文典

クーラーク ステルン、一般文學史問答

クーラーク クラール、近世劇界史

クーラーク ガードナー、ダント

クーラーク レオパルジイ、エッセース

クーラーク モンテンイ、エッセイス

クーラーク セントアーブ、エッセイス

クーラーク マツクコーレー、日本文學

クーラーク ゲデックス、拉丁讀本

クーラーク マキアベリー、君主論

クーラーク シゼロ、プロ・クルエンチオ

クーラーク スウヰート、言語ノ歴史

クーラーク リレイ、拉丁俚諺辭典

クーラーク シルレル、全集(英譯)

クーラーク メルチエル、希臘文典

クーラーク ボツチ、拉丁文典

- 清原雄風
木村定良
加納諸平
中院通勝
金澤庄三郎
大塚彥太郎
平由豆流
梁 緯
大窪行
後藤穀校
榎君錫
陽湖惲敬
六如上人
山田翠雨
松崎健五郎
葛原詩話
大雲山房全集
御選唐宋詩醇
慊堂遺文
龜北全集
同 上
英西辭書
ホルチエ
アレキサンンドロウ
センチュリー社
ムーレットダンデル
ランゲンシャイト
坪内雄藏
類題吟野集
類題草野集
類題鍛玉集
岷江入楚
增田子信
新編紫史
後撰和歌集標註
星廢集
詩聖堂詩集
山陽詩抄
清十家絕句
花曆百詠
樂府類解
翠雨軒詩話
大雲山房全集
御選唐宋詩醇
慊堂遺文
大雲山房全集
同 上
英西辭書
ホルチエ
アレキサンンドロウ
センチュリー社
ムーレットダンデル
ランゲンシャイト
坪内雄藏
英詩文譯釋
イブセン社會劇
高安月郊
内田鐵三郎
淺野和三郎
大谷正信
國學院
富山房
中村秋香
嶋文次郎
英國戲曲界史
井上哲次郎
ウエーニヒ
二十世紀字書
フリウゲル
獨英々獨字典
チエムバ
新獨和辭典
獨遠辭典
靈英字典
英西辭書
英蘭辭書
英西辭書
ゼ、センチュリー、ジクショナリー
獨英々獨字典
獨英字典
獨英小字書
- 第十門 雜 書
- 高木甚平保志虎吉
獨和新字林
フハンクワグ子ル スタンダード字典
龍野元四、小日向定次郎
英和讀書辭典
イーストレーキ大森俊次
英和新辭彙
スソン勝俣證吉郎
應用英和新字典
上田萬年、上田敏
最新英和辭典
アーサー・ロイド佐々木文美
作文辭彙
神田乃武横井冬
新譯英和辭典
ランゲンシャイト ランド、ワンド、ロイテ、イン、エンガランド
新井君美
東雅
山田美妙
熟語大辭林
三省堂
漢和大字典
山田美妙
日本大辭書
平野彦次郎
故事熟語字典
山田美妙
漢語辭林
周伯琦
六書正誦
顧謫吉
蘇
坂本健一
社會文學辭典
山岡俊明
- 坪内雄藏
英詩文譯釋
イブセン社會劇
高安月郊
内田鐵三郎
淺野和三郎
大谷正信
國學院
富山房
中村秋香
嶋文次郎
英國戲曲界史
井上哲次郎
ウエーニヒ
二十世紀字書
フリウゲル
獨英々獨字典
チエムバ
新獨和辭典
獨遠辭典
靈英字典
英西辭書
英蘭辭書
英西辭書
ゼ、センチュリー、ジクショナリー
獨英々獨字典
獨英字典
獨英小字書
- 共益商社
日本體育會
廿六年改正
立花銑三郎
好古社
富山房
喜多村信節
節長秀
正岡子規
子規隨筆續編
松亭金水
松亭漫筆
新井君美
白石先生叢書
- ウエンクステルン 大日本書史
軍艦圖
海軍問答
日本ノ体育
體操教範
立花文學士遺稿
大日本名家全書
和漢名數
嬉遊笑覽
本朝俗說辨
子規隨筆續編
白石先生叢書



投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せず

一雑誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論説諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さざるべし

明治三十七年十二月十一日印刷

明治三十七年十二月十五日發行

編輯兼發行者 吉 村 政 行

印 刷 者 生 沼 倍 男

石川縣金澤市早道町五十六番地
同縣同市穴水町二番丁廿九番地

明治印刷株式會社
同縣同市高岡町九十九番地

印 刷 所 發 行 所 第四高等學校北辰會

